岩手県文化財調査報告書第71集

東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書

—XVI—

(猫谷地遺跡)

昭和57年3月

岩手県教育委員会

日本道路公団

序

地域開発に伴う道路など交通網の整備事業は、現代社会の進歩発展から生ずる必然的な要請であり、本県においても、このような建設事業が多く計画・実施されております。

これらの開発事業に関連して、私たちには、先人が長い歴史の中で培い育んできた貴重な文化遺産を保護し、新たな文化創造の糧として活用していく責務があります。

国土開発計画に基づいて建設される東北縦貫自動車道は、産業・経済開発の大動脈として多方面からの期待をになう国家的な大事業であり、宮城県境より西根インターまでは、すでに供用され、現在は更に秋田・青森県境へと工事が進められております。

岩手県教育委員会は、この供用区間に関係した99遺跡について、日本道路公団仙台建設局の委託によって、昭和47年度から７か年にわたって発掘調査を実施し、その整理と報告書の作成を、昭和53年度から４か年計画で実施して参りました。本年度は、その最終年度にあたります。

本報告書は、東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書の第XVI冊目として、和賀郡江釣子村の猫谷地遺跡について、調査結果をとりまとめたものであります。

調査の結果、検出されたおもなものに、縄文時代（中期～後期）の土壙群と、古代の集落跡があります。中でも集落跡は、同一地域に古墳～奈良～平安の各時代にまたがって形成されていたものであり、その様相や変遷の過程を知る多くの成果を得ることができ、古代集落のあり方を知る上で、貴重な資料を提示いたしております。

この報告書が、研究者のみならず、広く一般のかたがたに活用され、埋蔵文化財に対する理解が一段と深められるよう願ってやみません。

ここに、調査について御援助・御協力をいただいた地元教育委員会はじめ関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

昭和57年３月

岩手県教育委員会

教育長　新　里　　盈

例　　言

1．本書は、東北縦貫高速自動車道関係遺跡調査報告書第XVI分冊として、和賀郡江釣子村に所在する猫谷地遺跡について作成したものである。なお猫谷地遺跡は南方の自然堤防上に立地する猫谷地古墳群の一部と北方の低位段丘上に位置する本宿遺跡の一部にあたる地域であり、本来は個々に登録されているものであるが、本調査にあたってはそれら両地区を合わせて「猫谷地遺跡」としたものである。

2．発掘調査は日本道路公団より委託をうけ、岩手県教育委員会が主体となり昭和48年5月から10月にかけて自然提防上に当たる南半部、10月～1月そして昭和49年4月～5月、10月～11月にかけて北半部分を調査した。調査面積は合わせて12,960㎡である。

調査は菊地郁雄、山口興典、三上昭、吉田努、阿部省吾、高村嘉夫、高橋文夫、高橋義介、中川重紀、佐藤和男、千葉周秋、佐伯研二、中村清也、四井謙吉、藤井敏明、斎藤淳、新沼武秀が担当し菊地郁雄がそれを総括した。

3．調査及び整理に当っては次の方々と機関のご教示、ご協力を賜わった。（敬称略、順不同）

田中喜多美（県文化財保護審議員）
板橋　源（県文化財保護審議員、県立博物館長岩大名誉教授）
草間俊一（県文化財保護審議員、県立盛岡短期大学学長）
司東真雄（県文化財保護審議員）
林　謙作（北海道大学）
工藤雅樹（宮城学院大学）
桑原滋郎（文化庁）
中川久夫（東北大学）
庄司貞雄（東北大学）
高橋信夫（県立博物館）
斎藤尚巳（北上市教育委員会）
沼山源喜治（北上市市史編さん室）
本堂寿一（北上市立博物館）
佐久間豊（千葉県教育委員会文化課）
辻　秀人、及川　洵、遠藤勝博
東北歴史資料館
宮城県教育委員会文化財保護課
岩手県埋蔵文化財センター
江釣子村教育委員会

4．資料の鑑定、分析については次の方々と機関のご教示ご協力を賜った。（敬称略、順不同）

石材鑑定	大船渡農業高校　佐藤二郎
種子鑑定	県文化財保護審議会委員　村井三郎
木炭鑑定	木炭協会経営指導員　早坂松次郎
炭化米鑑定と執筆	佐藤敏也（国分寺市在住）
土器胎土分析	種市高校　照井一明　　岩手県立博物館　岩手県工業試験場
火山灰分析と執筆	岩手大学農学部　井上克弘　東北大学農学部　山田一郎

カーボンデーティング　　日本アイソトープ協会

5．本書に掲載した地形図は、建設省国土地理院発行の２万５千分の１地形図、20万分の１地形図を使用した。

6．グリット配置図は、日本道路公団作成による「東北高速道計画図」を使用し、遺跡、遺構等の方向表示は、同図の第10系座標の北方向である。

7．遺跡における層相の色調観察は、小山・竹原編著「新版　標準土色帳」（日本色研事業株）を使用した。

8．遺物、写真、実測図等の資料は、岩手県教育委員会事務局文化課において保管している。但し、遺物の一部は岩手県立博物館に移管し展示されている。

9．調査主体、岩手県教育委員会、日本道路公団。

10．調査担当者、岩手県教育委員会文化課。

11．本書の執筆、編集は斎藤淳が総括したが、序文１．経過２．調査方法については吉田努、３．整理については相原康二、地形概観の執筆は佐藤二郎、縄文時代（遺構遺物等）田村壮一、古代（遺構、遺物等）は斎藤淳がそれぞれ執筆担当した。

12．土器実測は、佐久間豊、田村壮一、斎藤淳が行い、トレース等は漆原悦子、小西エイ子、黒田あや子、菊池純子、秋葉良子の協力を得て行なった。

13．挿図の縮尺は縄文時代（遺構1/60、1/50、遺物1/3、1/6）、古代（遺構、遺物1/3）を原則としているが一部にあっては率の異なる場合がある。

14．古代の遺物で、堆積土出土遺物については番号に○印をつけて区別してあり、土師器の黒色処理されたものは「あみ点」を、須恵器の断面は黒塗りしてある。

目　　次

序　文
1．調査の経過
2．調査の方法について
3．整理について

本　文
Ⅰ　地形概観…… 1
—和賀川流域—
Ⅱ　遺跡の立地と周辺の遺跡
1. 位置…… 9
2. 地形・地質…… 9
3. 基本層序…… 9
4. 周辺の遺跡…… 10
Ⅲ　検出された遺構と遺物…… 19
1. 縄文時代の遺構と遺物…… 20
(1)竪穴住居跡…… 20
(2)竪穴状遺構…… 23
(3)大型ピット…… 24
(4)その他のピット類…… 74
(5)落ち込み遺構…… 76
(6)出土遺物について…… 89
土器・土製品・石器
(7)考察 —大型ピット— …… 101
(8)まとめ…… 115
2. 弥生時代の遺物…… 116
3. 古代の遺構と遺物…… 117
(1)竪穴住居跡…… 117
(2)竪穴状遺構…… 240
(3)掘立柱建物跡…… 245
(4)周隍状遺構…… 246
(5)考察とまとめ…… 255
Ⅳ　猫谷地出土の籾について…… 291
Ⅴ　東北地方における奈良～平安時代の粉状パミスについて…… 301
Ⅵ　土器胎土の岩石学的方法による分析結果…… 318
Ⅶ　土器胎土の螢光Ｘ線による分析結果…… 324
Ⅷ　鉄滓分析結果…… 331
Ⅸ　年代測定…… 332

図版（写真）ページ
図版 1 ……遺跡付近の航空写真
図版 2 ……Ａ～Ｄ区遺構写真
図版 3 ……Ｅ～Ｋ区遺構写真
図版 4 ……遺跡遠景
図版 5 ～ 8 ……縄文時代の遺構
図版 9 ～16……縄文時代の遺物
図版17～37……古代の遺構
図版38～57……古代の遺物
図版58～59……出土した籾
図版60～……胎土分析資料

序　　文

1　経　過

県内の東北縦貫自動車道建設は、昭和40年11月仙台・盛岡間の基本計画の決定に始まり、昭和43年４月の施行命令によって具体化される。

これによって破壊される埋蔵文化財の取扱いについては、文化庁と日本道路公団の覚書により、岩手県教育委員会がおこなうことになった。

まず、一関・盛岡間の路線予定地内の分布調査が、昭和42年及び43年に実施され、昭和45年２月19日水沢・花巻間40km、同年11月25日一関・胆沢間30km、46年２月10日石鳥谷・盛岡間29kmの路線発表がなされたことに伴ない、昭和47年８月～９月に、用地幅50mで現地確認調査、同年10月インターチェンジ及び付帯施設予定地内の現地確認調査等が順次実施され、一関・盛岡間の調査対象遺跡は当初82ケ所確認された。

これらの破壊される遺跡について、できるだけくわしく調査記録し、遺跡のもつ歴史的価値を永く後世に伝えることを目的とし、昭和47年度に北上市・花巻市・金ケ崎町所在の遺跡から調査が開始され、用地買収、着工順位に従って順次すすめられた。

この間、調査除外としたもの４ケ所がある。一関市苅又遺跡は過去の開田による破壊の程度が大きく煙滅、一関市松の木遺跡は宅地化による破壊、衣川村桝形陣場跡は所在位置が路線からはずれる。衣川村二枚貝化石層は遺跡としての調査対象としないなどの理由による。

また、路線変更によって保存されたのが、平泉町伝護摩堂跡である。この遺跡は奥州平泉文化との関連が考えられ、路線発表後に路線内に所在することが確認され、急遽日本道路公団と協議し、路線を西側に変更した。一方、工事直前もしくは工事中に新しく確認追加されたものに、土取場の和賀町梅ノ木Ⅰ～Ⅶ遺跡、路線内では江釣子村下谷地Ｂ遺跡・紫波町墳館遺跡および柳田館遺跡がある。

昭和49年６月20日、盛岡・安代間53kmの路線発表があり、この区間のうち、盛岡・西根（松川まで）間が調査対象の日程にくりこまれ、当初、８遺跡が確認されたが、工事中に滝沢村卯遠坂遺跡が発見追加され、更に紫波インターチェンジの誘致新設に関連し、栗田Ⅰ～Ⅲ遺跡が調査対象となる。

以上のように、一関・西根（松川まで）区間の調査対象遺跡数は、除外、新規発見などによる変動を見て来た。このことは、埋蔵文化財保護の基本の一つとして、分布調査の重要性が改めて問われる一面でもある。結局、調査遺跡数は、99遺跡、18市町村におよぶものとなった。

調査をすすめる一方、文化庁、日本道路公団との協議によって、前述の伝護摩堂跡を完全保

在したのをはじめ、江釣子村鳩岡崎遺跡の縄文中期の大竪穴住居跡の一部分、水沢市石田遺跡では、奈良時代末から平安時代初期に相当する焼失家屋１棟、紫波町上平沢新田遺跡では、平安時代相当の焼失家屋１棟の路線境検出遺構を一部精査の上、それぞれ埋めもどし現地保存をした。

また、江釣子村猫谷地遺跡の古墳１基、紫波町墳館遺跡の墳基１基、柳田館遺跡・盛岡市太田方八丁遺跡の一部は、施工方法や設計変更等によって可能な限りの保存策をとった。

しかし、これらの保存遺構や遺跡の管理、活用は今後十分に留意しなければならないものであり、それがなされなければ完全な保存策であったとは言い得ない。

昭和47年度に始まった調査は、昭和53年度の紫波町栗田Ⅲ遺跡を最後に終り、以後、整理作業をすすめるなかで逐次報告書を刊行してきたが、本年度はその最終年度にあたる。

東北縦貫自動車道建設の具体化以来、事業をすすめるに当って、終始指導と助言をくださった県内外の協力者、および献身的な協力を得た関係市町村教育委員会、学校、関係諸機関、地元作業員の方々をはじめ各位に改めて敬意を表したい。

なお、西根町以北の東北縦貫自動車道関連遺跡は、(財)岩手県埋蔵文化財センターによって調査されることになり、昭和53年度から実施されている。

2　調査の方法について

(1)　調査対象範囲の選定は、遺跡の中で用地内および付帯施設を含む関連部分は、すべて調査対象とした。更に、当該遺跡周辺の分布調査を可能な限り実施することにつとめ、調査地とそれをとりまく遺跡群との関連解釈の一助に資することとした。

(2)　調査対象全域に次のような地区を設定した。

①地区設定のための原点は、日本道路公団測量の路線内中心杭の任意のものに定め、それと他の中心杭の２点間を見通す直線と、原点を通りこれに直交する直線を座標の基準線とした。

②南北の基準線をもとに、30mを１ブロックとし、北から順にA・B……の記号を付し、これを東西、南北に10等分し３m×３mのグリットを設定、グリット名は北から順にa—j、南北基準線から東方へ50・53・56……。西方へ03・06・09……。の記号を付し、これとブロック記号の組合せで表わした。例えば、Aa03・Aa50のようになる。

(3)　発掘および記録について、発掘調査は絶対にくりかえしの出来ない作業である。特に、緊急調査と言う性格と記録保存を考えるとき、調査の過程で観察された事項は可能な限り詳細に、しかもすべて客観的データーとして記録されねばならないし、記録者の解釈と観察された事実とが混同されぬよう留意しながら①遺構群をひとつのまとまりとして把握すること、文化層が重なっている場合、層序とともにそれぞれの文化層のひろがりを確実に把握すること、更に緊急調査の場合、事後の保存が困難である以上、トレンチによる部分発掘は回避すべきであ

ることからグリット設定にもとずく平面発掘につとめた。

②原則として３ｍ×３ｍのグリットで、調査地における遺物・遺構の分布状況を把握するため、「ちどり」状に人力による粗掘をすることにしたが、結果的に機械力の導入も多かった。遺物・遺構の検出を見た場合、その具体的内容を究明するため必要範囲の全面発掘を実施した。

③遺構が検出された場合、該当グリット名を付した。その場合もっとも北西に位置するグリット名で呼称することを原則とした。精査に当っては、２分法・４分法による平面発掘に留意し、遺構の性格と内部堆積状況・構造・重複等を把握しながら完掘することにした。

④遺物は、原則としてグリットごとに取り上げ、遺跡記号・出土年月日・出土地点・出土層位を記録し、遺構に直接関係するものや、年代決定の資料となり得るものについては出土レベル、位置を平面図に記録し、遺物番号を付して取り上げた。

⑤遺物の出土状況・層位・遺構に関する所見等の記録は、実測図・遺構カード・フィールドノートを用い、全体の問題点、進行は調査日誌に記録した。

⑥写真記録は、35㎜版モノクロ、カラー・６×７㎝版モノクロを主として用いた。

(4) 実測方法　①発掘された遺構の実測は、原則として遣り方実則を用い、平板実測は補助にとどめた。②原図の縮尺は1/20に統一したが、遺構・遺物の細部については、必要に応じて1/10縮尺を採用した。

(5) 関連科学との連けいについて、総合的な見地からの記録作業という意味で、考古学のみならず関連科学の研究者、とくに自然科学系統の分野との連けいに留意し、調査現場の実見と見解を求めることにつとめた。

3　整理について

整理にあたっては調査の性格(「緊急調査」と「記録保存」)を十分に考慮した。したがって可能な限り詳細な記録を作成することと、その公開を主目的とした。なおいわゆる「行政調査（とくに緊急調査)」と「学術調査」の異同を、その「現場」に投入された技術、方法の次元に還元して論ずるのは妥当ではない。「緊急調査」の「現場・調査」の位置づけについては、本課にも若干の反省点がある。

(1) いわゆる「珍品主義」・「一番主義」を排し、得た資料のすべてを観察し、それぞれに応じた記録を作成することを目ざした。各調査地(「遺跡」)・調査資料の正当な評価の資料を提示するためであるし、それが「記録保存」の趣旨にも連なるからである。その結果として記述が若干繁雑になった。ただし実際上は、調査担当者の設定仮説が整理担当者に十分に伝わっていないなどのことも目立ち、満足のいく整理を必ずしもなしえなかった調査地もまた多い。遺憾である。また本書に提示した諸仮説、見解は本課の統一見解ではなく、整理担当者のそれである。具体的には、①観察事項の正確な伝達　②仮説の提示とその展開、吟味　③新規の仮説、

問題点の提起　④新しい資料操作法の提示、などを目ざしたが、前述のように必ずしも十分には実施できなかった。

(2)　調査地はそれのみ単独での評価は避け、一定の地域内とりわけ他の「遺跡」との関係を重視して解釈・評価するように努めた。『周辺の遺跡』の項がやゝ繁雑にわたっているのはその為である。これは(1)の実践をめざすのみならず〝遺構存在を遺跡成立の絶対条件視する見解〟への反論のためにも必要であり、とりわけ埋蔵文化財保護にはきわめて重要な観点である。

(3)　調査時と同様に「関連諸科学・諸技術との連携」に留意した。(1)で述べた目的を満足させる為に必要不可決であり、さらにはその保存処理・各種データの蓄積・その公開も本課に課せられた責務だからである。今後の継続実施を考慮し、可能なものは努めて本県内の機関・公所・その他に連携ないし委託先を求めた。具体的実施例は、年代測定(カーボンディティング・熱ルミネッセンス法他)・材質鑑定（石材他)・樹種鑑定（木器・木材・柱脚他)・種子鑑定（炭化米・雑殻類・雑草類他)・花粉分折・人骨(歯)鑑定・獣骨(家畜を含む)鑑定・組成分折(釉薬・土器胎土・火山灰他)・燐分折・地質学的諸分折等にわたるが、今後も新分野を加える必要がある。保存処理は、木器・木材・柱脚類、鉄器類を中心に実施しているが、これも今後さらに新分野のものについて実施する必要がある。地質学的知見・教示は(2)などとの関連で、調査地および周辺の「遺跡」の立地・占地に関して、また遺物と出土層（とくに火山灰層）との関連に留意して援用した。大規模調査地については航空写真・ステレオカメラにもとずく作図を採用した。

(4)　すべての対象（遺構・遺物・「遺跡」）について、技法的分折に加え組みあわせ重視の観点をも加えてある。

(5)　以上の技術的基準・指標として『出土遺物の整理について』(昭和47年作成のち一部修正)を作成し大略それに準拠した整理を実施した。細部は省細するが、大枠は①観察事項を正確に伝えるための作図法他の技術的部門、②文章表現上の留意点とからなる。後者については観察事項と解釈の峻別・不明事項の不明の理由明示などがとくに求められている。

(6)　得た厖大な資料の公開は、別途計画のもとに実施されるであろう。

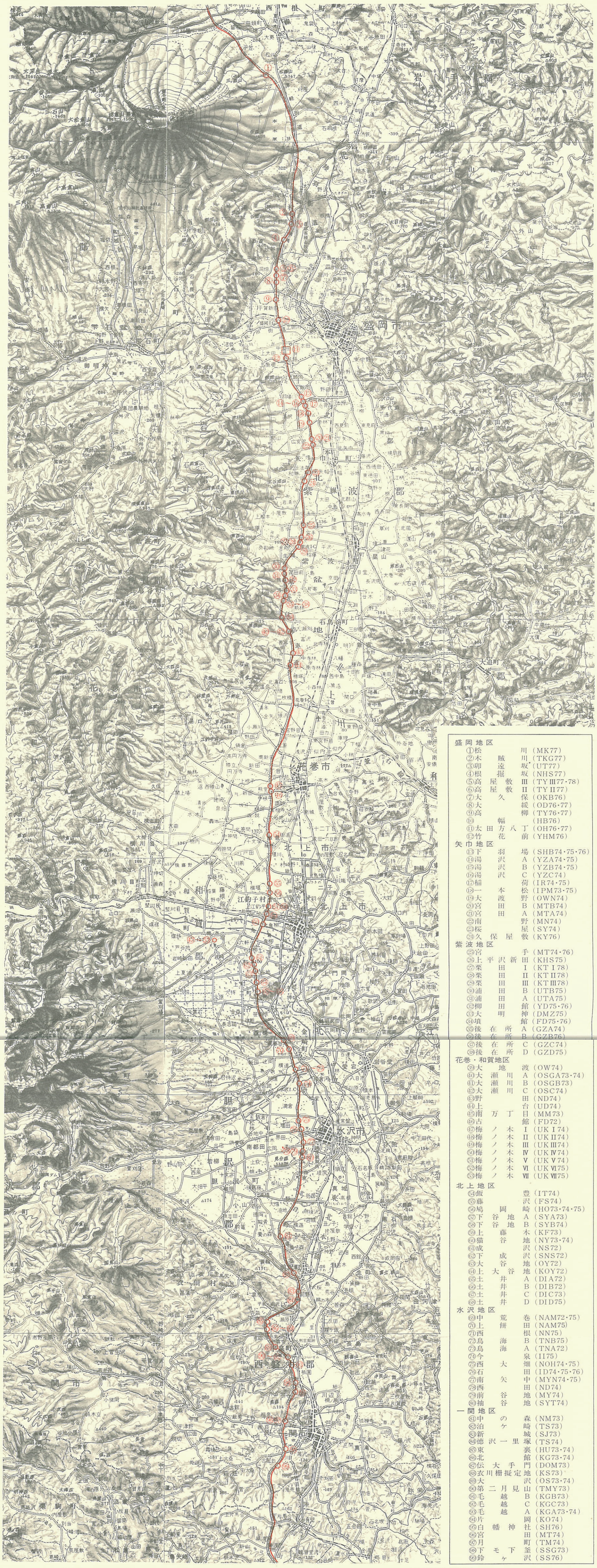
東北自動車道関係調査遺跡一覧

地区	市町村名	No.	遺跡名	調査年度
盛岡	西根町	1	松川	52
	滝沢村	2	木賊川	52
		3	卯遠坂	52
		4	根掘坂	52
		5	高屋敷Ⅲ	52・53
		6	高屋敷Ⅱ	52
		7	大久保	51
		8	大緩	51・52
		9	高柳	51・52
	盛岡市	10	幅	51
		11	太田方八丁	51・52
		12	竹花前	51
矢巾	都南村	13	下羽場	49・50・51
		14	湯沢A	49・50
		15	湯沢B	49・50
		16	湯沢C	49
		17	稲荷	49・50
	矢巾町	18	一本松	48・50
		19	大渡野	49
		20	宮田A	49
		21	宮田B	49
		22	南野	49
		23	桜屋	49
		24	久保屋敷	51
	紫波町	25	宮手	49・51

地区	市町村名	No.	遺跡名	調査年度
紫波		26	上平沢新田	50
		27	栗田Ⅰ	53
		28	栗田Ⅱ	53
		29	栗田Ⅲ	53
		30	浦田B	50
		31	浦田A	50
		32	柳田館	50・51
		33	大明神	50
		34	墳館	50・51
		35	御在所A	49
		36	御在所B	51
		37	御在所C	49
		38	御在所D	50
花巻・和	石鳥谷町	39	大地渡	49
		40	大瀬川A	48・49
		41	大瀬川B	48
		42	大瀬川C	49
		43	野田	48
		44	上台	49
	花巻市	45	南万丁目	48
		46	古館	47
	和賀町	47	梅ノ木Ⅰ	49
		48	梅ノ木Ⅱ	49
		49	梅ノ木Ⅲ	49
		50	梅ノ木Ⅳ	49

地区	市町村名	No.	遺跡名	調査年度
和賀		51	梅ノ木Ⅴ	49
		52	梅ノ木Ⅵ	50
		53	梅ノ木Ⅶ	50
北上	北上市	54	飯豊	49
		55	藤沢	49
	江釣子村	56	鳩岡崎	48・49・50
		57	下谷地A	48
		58	下谷地B	49
		59	上藤木	48
		60	猫谷地	48・49
	北上市	61	成沢	47
		62	下成沢	47
		63	大谷地	47
		64	上大谷地	47
		65	土井A	47
		66	土井B	47
		67	土井C	48
		68	土井D	50
水沢	金ケ崎町	69	中荒巻	47・50
		70	上餅田	50
		71	西根	50
		72	鳥海B	50
		73	鳥海A	47
	水沢市	74	今泉	50
		75	西大畑	49・50

地区	市町村名	No.	遺跡名	調査年度
一関		76	石田	49・50・51
		77	南矢中	49・50
		78	西田	49
		79	前谷地	49
		80	袖谷地	49
	胆沢町	81	中の森	48
	前沢町	82	泊ケ崎	48
		83	新城	48
		84	徳沢一里塚	49
	衣川村	85	東裏	48・49
		86	北館	48・49
		87	伝大手門跡	48
		88	衣川柵跡推定地	48
	平泉町	89	大沢	48・49
		90	第二月見山	48
		91	毛越B	48
		92	毛越C	48
		93	毛越A	48・49
		94	片岡	49
		95	白幡神社	51
	一関市	96	宮田	49
		97	月町	49
		98	下モ下釜	48
		99	鈴ケ沢	51



盛岡地区
- ①松川（MK77）
- ②木賊川（TKG77）
- ③卯遠坂（UT77）
- ④根掘坂（NHS77）
- ⑤高屋敷Ⅲ（TYⅢ77・78）
- ⑥高屋敷Ⅱ（TYⅡ77）
- ⑦大久保（OKB76）
- ⑧大緩（OD76・77）
- ⑨高柳（TY76・77）
- ⑩幅（HB76）
- ⑪太田方八丁（OH76・77）
- ⑫竹花前（YHM76）

矢巾地区
- ⑬下羽場（SHB74・75・76）
- ⑭湯沢A（YZA74・75）
- ⑮湯沢B（YZB74・75）
- ⑯湯沢C（YZC74）
- ⑰稲荷（IR74・75）
- ⑱一本松（IPM73・75）
- ⑲大渡野（OWN74）
- ⑳宮田B（MTB74）
- ㉑宮田A（MTA74）
- ㉒南野（MN74）
- ㉓桜屋（SY74）
- ㉔久保屋敷（KY76）

紫波地区
- ㉕宮手（MT74・76）
- ㉖上平沢新田（KHS75）
- ㉗栗田Ⅰ（KTⅠ78）
- ㉘栗田Ⅱ（KTⅡ78）
- ㉙栗田Ⅲ（KTⅢ78）
- ㉚浦田B（UTB75）
- ㉛浦田A（UTA75）
- ㉜柳田館（YD75・76）
- ㉝大明神（DMZ75）
- ㉞墳館（FD75・76）
- ㉟後在所A（GZA74）
- ㊱後在所B（GZB76）
- ㊲後在所C（GZC74）
- ㊳後在所D（GZD75）

花巻・和賀地区
- ㊴大地渡（OW74）
- ㊵大瀬川A（OSGA73・74）
- ㊶大瀬川B（OSGB73）
- ㊷大瀬川C（OSC74）
- ㊸野田（ND74）
- ㊹上台（UD74）
- ㊺南万丁目（MM73）
- ㊻古館（FD72）
- ㊼梅ノ木Ⅰ（UKⅠ74）
- ㊽梅ノ木Ⅱ（UKⅡ74）
- ㊾梅ノ木Ⅲ（UKⅢ74）
- ㊿梅ノ木Ⅳ（UKⅣ74）
- (51)梅ノ木Ⅴ（UKⅤ74）
- (52)梅ノ木Ⅵ（UKⅥ75）
- (53)梅ノ木Ⅶ（UKⅦ75）

北上地区
- (54)飯豊（IT74）
- (55)藤沢（FS74）
- (56)鳩岡崎（HO73・74・75）
- (57)下谷地A（SYA73）
- (58)下谷地B（SYB74）
- (59)上藤木（KF73）
- (60)猫谷地（NY73・74）
- (61)成沢（NS72）
- (62)下成沢（SNS72）
- (63)大谷地（OY72）
- (64)上大谷地（KOY72）
- (65)土井A（DIA72）
- (66)土井B（DIB72）
- (67)土井C（DIC73）
- (68)土井D（DID75）

水沢地区
- (69)中荒巻（NAM72・75）
- (70)上餅田（NAM75）
- (71)西根（NN75）
- (72)鳥海B（TNB75）
- (73)鳥海A（TNA72）
- (74)今泉（II75）
- (75)西大畑（NOH74・75）
- (76)石田（ID74・75・76）
- (77)南矢中（MYN74・75）
- (78)西田（ND74）
- (79)前谷地（MY74）
- (80)袖谷地（SYT74）

一関地区
- (81)中の森（NM73）
- (82)泊ケ崎（TS73）
- (83)新城（SJ73）
- (84)徳沢一里塚（TS74）
- (85)東裏（HU73・74）
- (86)北館（KG73・74）
- (87)伝大手門（DOM73）
- (88)衣川柵擬定地（KS73）
- (89)大沢（OS73・74）
- (90)第二月見山（TMY73）
- (91)毛越B（KGB73）
- (92)毛越C（KGC73）
- (93)毛越A（KGA73・74）
- (94)片岡（KO74）
- (95)白幡神社（SH76）
- (96)宮田（MT74）
- (97)月町（TM74）
- (98)下モ下釜（SSG73）
- (99)鈴ケ沢（SS76）

岩手県における東北縦貫自動車関係遺跡分布図

1：200,000

0 5 10 15 20 キロメートル

本　　文

Ⅰ　地形概観

―― 和賀川流域の地形について ――

大船渡農業高校　佐藤二郎

1．はしがき

約185万年前に始まり現世におよんでいる第四紀は、地球表面の諸形態・模様を形成した時代である。この時代の産物は、俗に土、砂、砂利と呼ばれるものを主体とする。それらは、その根源物質の種類と性質、地域の古地形環境、古気候、古植生および地殻の変動などの相互作用のもとに形成され、それぞれがもっとも安定した空間に定着する。ところで、このような性格を有する第四紀の産物のうち、比較的新しいものは、その安定空間を段丘というかたちでとる。段丘とは、段丘面と呼ばれる平坦面と、段丘崖と呼ばれる崖を構成要素とする地形をいうが、それはまず、面を平坦化する作用によって、つぎにそれを段化させる働きによってつくられる。この面の平坦化作用、段化作用を支配するものとして、第一義的に流水および海水準があげられる。

上記のことから、段丘地形の研究は、その対象が狭小であるとしても、可能な限り広汎な視野にたつ地質学的手法によらなければ心もとない。この地域を含む北上川中流域の地形学的研究はかなり以前からなされているが、上記のような理念のもとに行われだしたのは1960年代以降のことである。[1).2).3)]

筆者がここに述べる内容は、1960年代初期から1970年前後にかけておこなった、この地域の地下地質の研究成果の一部に、最近の研究の成果を加えたものである。[4).5)]

2．地形区分

北上川中流域は、北上山地と奥羽山地の境界に発達した起伏に富む低湿帯に埋積した土砂によって形成された、扇状地性段丘群の集合体といえる。そのため、その基盤の頂部が著しく高かった場所が、ときとして残丘となって露出することがある。[6).7)]

この地域の河岸段丘は、第1表のように区分され、それらは日本の第四系標準地域である南関東地域のそれと、同表のように対比される。これらの分布を第1図に示す。

第1表　和賀川下流域段丘対比表

年代＼地域		南関東	和賀川流域
沖積世		海岸平野	河岸平野
洪積世	後期	立川段丘	金ケ崎Ⅱ段丘
		武蔵野段丘	金ケ崎Ⅰ段丘
	中期	下末吉段丘	村崎野段丘
		多摩Ⅱ段丘 多摩Ⅰ段丘	西根段丘

3．地形各説

(1)　先第四系の残丘

北上市二子町宿の西方の飛勢（とばせ）森、同市飯豊町飯豊森の2箇処に、小規模に分布する。ともに

新第三系中新統下部の稲瀬層からなる。前者の地区では、後述の黒沢尻火山灰に覆われている。

(2) 段　丘

a．西根段丘　金ケ崎町の西方、西根地区を標式地とする。和賀川以南においては、和賀町石曽根から岩崎新田にわたる地区と六原扇状地の南縁沿いに、さらに六原扇状地の東半部を占める西根地区と六原町から相去町にかけて残丘状に分布する。これに対して同川以北では、尻平川沿岸の脊梁山地東縁部に、また、北上川東岸においては、わずかに江刺市正源寺台東部に分布するにすぎない。

西根段丘はかなり開析され、段丘面の頂部は、原形を失うまでに侵蝕されている。

この段丘の分布地域である金ケ崎町西部の台地は、近年著しく開発されてきたが、すべて農用地であることから自然斜面に沿う土地造成が主となっている。そのため、この段丘堆積物の露出がきわめて少ない。金ケ崎町細野の南方女夫坂附近での段丘崖の観察、同町大沢地区の深井戸資料（第２図(1)）によれば、その主体は、約10m に達する大・巨礫大の著しく風化した安山岩円礫層である。これと同じ風化円礫は、六原町道所森や西根工業団地の切割りでも見られる。花巻市尻平川部落および尻平川南岸の脊梁山地東縁に分布する段丘堆積物は、中・大礫を主体とする砂礫層を主とし、間に砂質粘土層をはさんでいる。

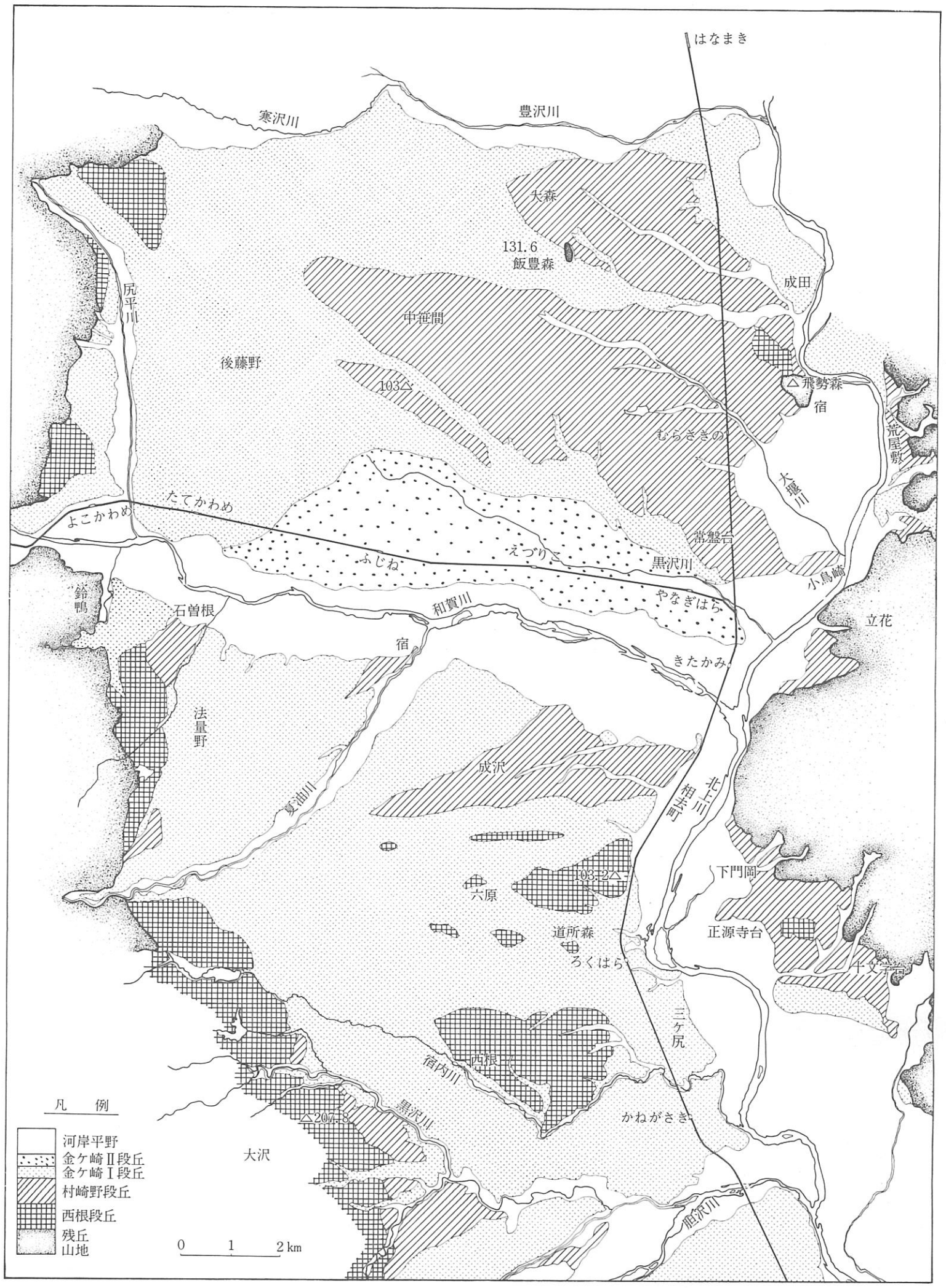
西根段丘の上位には、層厚10m におよぶ赤褐色火山灰、浮石および火山灰質粘土が重なる（第２図(2)）。中川他（1963）は、北上川中流域の火山灰層を古期のものから一首坂火山灰、前沢火山灰および黒沢尻火山灰の３層に区分したが、最近の金原（1981）の研究によると、この段丘の堆積面上は、これらすべての火山灰層におおわれているところが多いという。

b．村崎野段丘　北上市村崎野地区を標式地とする。和賀川以南の地域では、金ケ崎町西方の台地（西根段丘）辺縁部と和賀町法量野一帯および相去町成沢地区に分布する。北上川東岸地域では、北上市荒屋敷地区から立花、下門岡を経て江刺市十文字台に至る間に飛石状に分布する。和賀川以北の地域においては、花巻市中笹間から村崎野および小鳥崎にかけて、また、花巻市大森から成田に至る範囲に連続的に広がる。

六原扇状地の南縁部を流れる黒沢川南岸に分布するこの段丘は、下位面と約20m の比高を保つ。相去町成沢地区に分布するこの段丘面と下位面との比高は、東縁部において10～15m である。中笹間から小鳥崎にわたる地域のこの段丘面の下位面との比高も、北上市常盤台附近で約20m に達する。しかし、一般に北上平野中央に張り出ているこの段丘の段丘崖は、西漸するにつれて漸次比高を減じ、ついに下位の金ケ崎段丘面と収れんする傾向を示す。

地形面はやゝ開析されてはいるが、比較的新鮮で、よく原形をとどめている。

各地での露頭の観察および深井戸資料などによると、この段丘構成物の主体は、層厚20～30m の砂礫層であるが、和賀町宿附近および村崎野一帯では、その上部に層厚２～５m の白色細



第１図　和賀川流域の地形区分

粒火山灰質粘土が重なり、その上面に古土壌および乾裂が発達する。これが、降下火山灰なものか二次的堆積物なのか、いまのところ不明である。この段丘構成砂礫層は、中川他（1963）により飯豊礫層と呼称されているものである。礫は比較的新鮮な大・中円礫からなり、よく分級・淘汰をうけている。（第２図(3)・(4)）

村崎野段丘の堆積面の上位には、黒沢尻火山灰（中川他、1963）と呼ばれる火山灰層がのる。同層は、上部の赤褐色火山灰と、下位の浮石（村崎野浮石）とに分けられる。これらのうち村崎野浮石は肉眼的に数層に区分しうるが、金原（1981）はこれの詳細な重鉱物分析をおこない、両輝石安山岩質の下部（再定義の村崎野浮石）と、普通輝石安山岩質の上部（山形火山灰、標式地は胆沢町山形）とに２分した。また、これら各浮石の中部層の等層線図を求め、その噴出源を牛形火山（1340m）としている。（第２図(3)・(4)・(5)）

c．金ケ崎Ⅰ・Ⅱ段丘　金ケ崎町市街地附近を標式地とする段丘である。この段丘は、北上川中流域中もっとも広く分布し、面はほとんど開析されていない。北上川中流域の脊梁山地東縁に頂部をおく扇状地群は、すべてこの段丘に相当する。

この段丘は、北上市街地から和賀町竪川目にかけてのびる段丘崖により、上下２段に細分される。下位段丘の分布は、この区域に限定される。この段丘崖の比高は、北上市常盤台附近で約５ｍである。また、下位面と河岸平野との比高は、北上市街地一帯で２～３ｍである。

上位の金ケ崎Ⅰ段丘は、和賀川の南北両側において、それぞれ六原扇状地および後藤野扇状地を形成している。六原・後藤野両扇状地の比高に着目すると、河岸平野に対する前者の比高は15～20m に達するが、後者のそれは、和賀町横川目地区で10m 前後である。一方、六原扇状地東縁辺の金ケ崎町三ケ尻地区におけるこの面と河岸平野面との比高は、10m 程度である。また、夏油川下流域についてみると、岩崎地区で15m 前後の比高を有するのに対し、扇状地頂部の鍋割地区では30m にもおよぶ比高となっている。これらのことがらと、本来、南東方向に流動すべき夏油川が、北東方向に流れて和賀川と合流している事実とを総合すると、この面の形成後、和賀川筋を軸とする北側への地盤の傾動がおこり、その結果、Ⅱ面が生じたと考えられる。このように、Ⅰ・Ⅱ面の間には本質的な違いはなく、局地的な存在とみられる。

金ケ崎段丘の構成物は、瘤木礫層（中川他、1963）と呼ばれる礫層である。同層は、10～20ｍの層厚を有し、扇状地の末端部では淘汰・分級の進んだ新鮮な小・中礫によって構成されているが、頂部に向うにつれて次第に粒径を増し、大・巨礫を多く混えるようになる。この段丘の堆積面上に、この段丘形成期の火山灰はのらない。

d．河岸平野　主として北上・和賀両川沿いに分布する、沖積世に形成された平坦面で、水平的に氾濫原に移行する。この面に散在する集落は、ほとんどこの時期の砂礫を主体とする自然堤防上に形成されており、周辺の面より１～２ｍ高い。和賀川と北上川との合流点の北側

には、厚さ10m余の高含水腐植土層からなる後背湿地が形成されており、いわゆる軟弱地盤地帯となっている。

これまで、金ケ崎段丘以降の堆積物中には、火山灰層がないとみられていた。ところが1970年代後半に入り、北上川流域の各地で詳細な遺跡調査が進められてきた結果、沖積世の腐植土中に厚さ2～3cmの白色細粒火山灰が分布していることが確認されるに至った。これは1000ＡＤ頃の十和田火山の噴出物で、十和田ａテフラと呼ばれているものである。（大池；1972、町田・新井・森脇；1981）

4．地形発達史

上記の各段丘の分布上の特徴を指摘すると、西根段丘面は東西方向で傾斜が急であるが、南部から北部に向うにつれて、分布面積が少くなる。村崎野段丘は比較的緩傾斜で、東側で広がる面も西方に向うにつれて次第に狭くなると同時に比高を減じ、やがて下位の金ケ崎段丘と収れんする。金ケ崎段丘は面の傾斜がもっとも急で、下位の村崎野・西根両段丘の侵食谷を広くおおい、かつ、これら分布域の奥地、さらに脊梁山地内部までくい込んだ分布形態を示す。

世界的にみると、約70万年前に始まる第四紀中期初頭は、第三紀末から続いてきた海面上昇が止み、海面の低下が始まって最初の段丘の形成が始まった時期に相当する。それが中期末に近づくにつれ、地球は再び暖化しだして著しい海面上昇がおこった。その結果、この時期に形成された段丘面は、著しく緩傾斜となっている。約10万年前に始まる第四紀後期になると、気候は再び寒冷化して海面低下がおこり、約１万８千年前にはその極に達した。この時期の海面低下は氷期を通じて最大のもので、現海面下120～180mに達する。したがって、この時期の段丘面の広がりはもっとも大きく、かつ、傾斜も急である。沖積世になると、海面は再び上昇し、現在より少し高い水準に達した後、また後退して現在の海水準面となった。

この地域の４段の河岸段丘は、この第四紀中期以降の世界的な海水準変動に対して形成された、各地域の段丘地形のそれと、よくその特性が共通している。この地域の第四系ならびに地形も、上述の第四紀地史に沿うことはいうまでもない。

〔参考文献〕

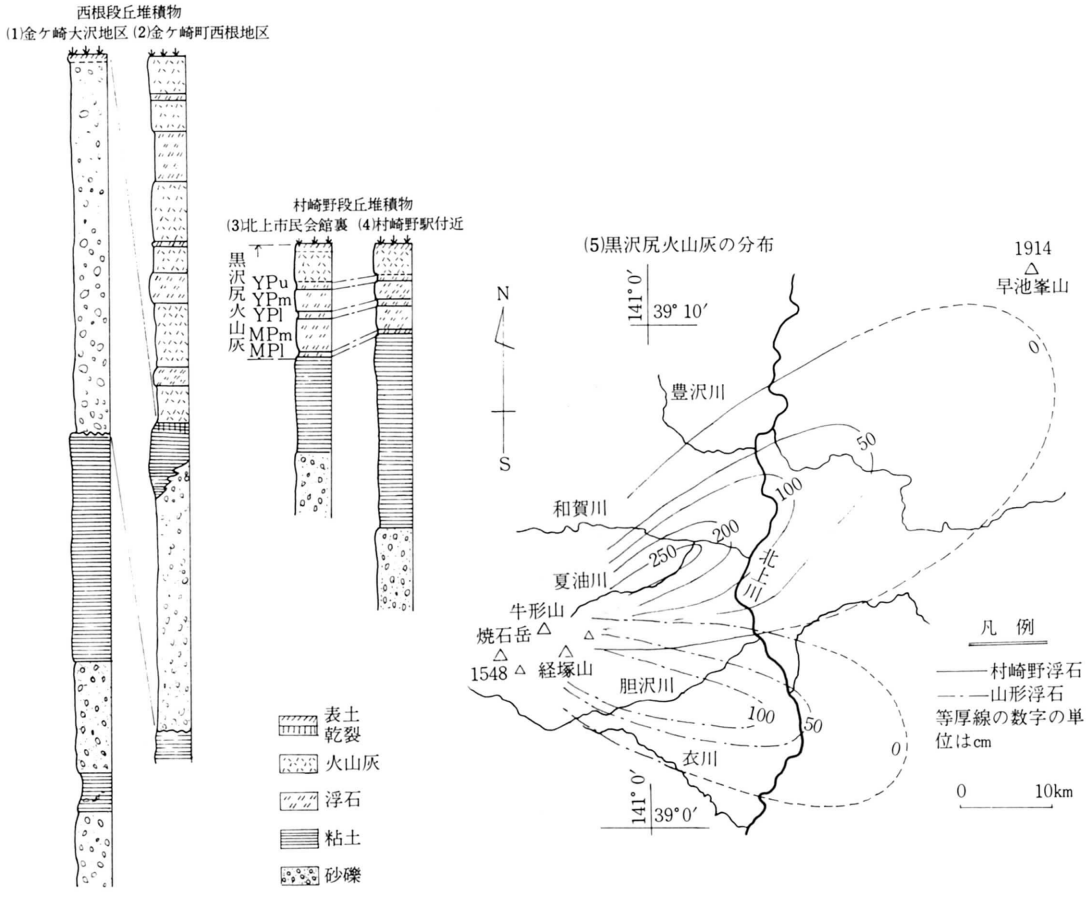
1）田山利三郎・土田定次郎、1933：北上山地の地形学的研究、其一、河岸段丘Ｂ。北上川及び馬渕川の河岸段丘、斉藤報恩会学術研究報告、No.22、１～84。

2）Fujiwara, K. 1959：Geomorphological development of the Kitakami Valley, Sci. Rep. Tohoku Univ, 7th ser, 8.8～38.

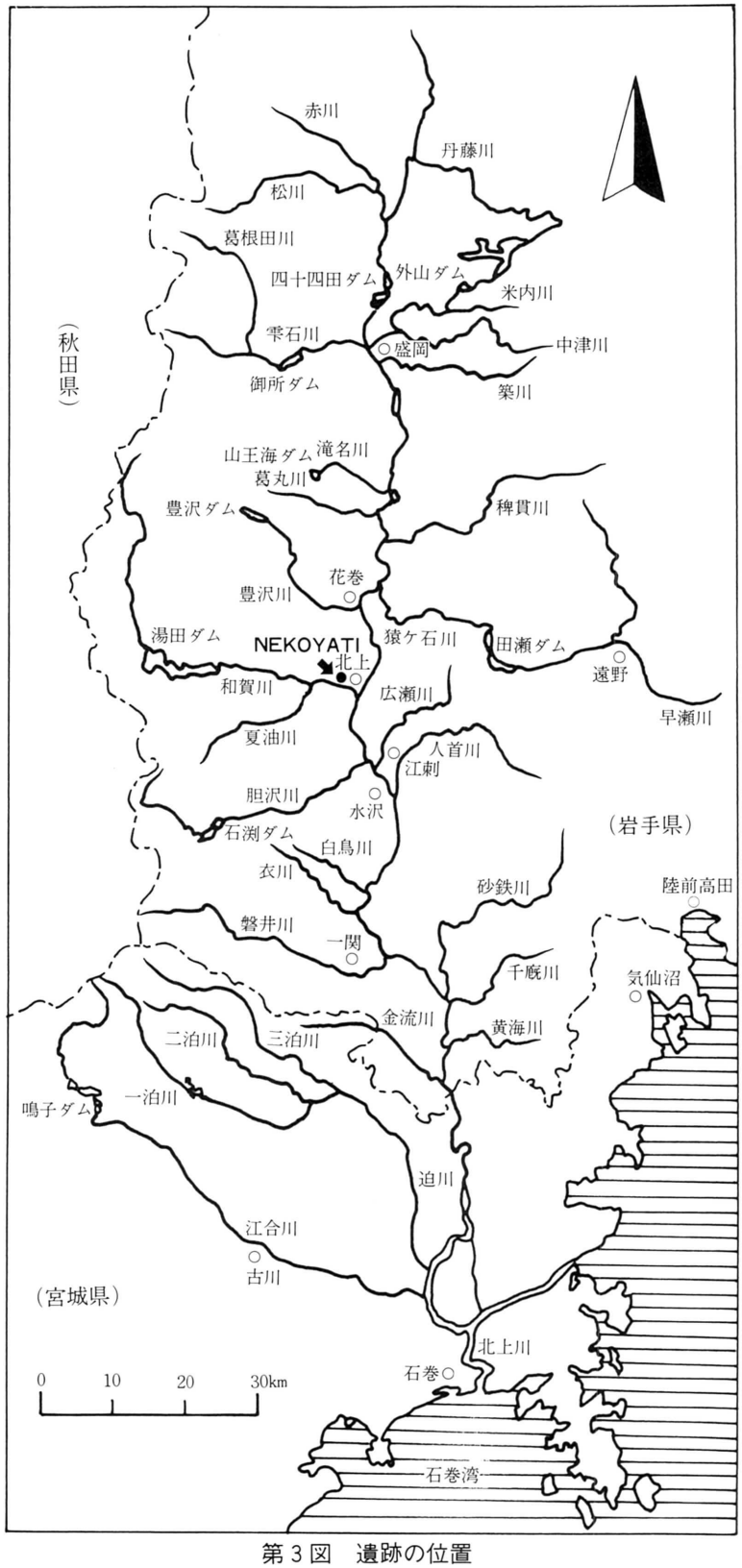
3）若生達夫、1956：北上川中流域の表層地質による地形面区分、東北地理、９．197～211.

4）中川久夫・岩井淳一・大池昭二・小野寺信吾・森由起子・木下尚・竹内貞子・石田琢二、1963・北上川中流沿岸の第四系および地形――北上川流域の第四紀地史(2)、地質学雑誌、69. 219－227.

7）金原光男、1981：北上川低地帯に分布する第四系の応用地質学的研究――花巻・金ケ崎――。岩手大学工学部修士論文（M. S.）
8）大池昭二、1972：十和田火山東麓における完新世テフラの編年。第四紀研究、第11巻、第4号、228－235。
9）町田洋・新井房夫・森脇広、1981：日本海を渡ってきたテフラ、科学、vol. 51、No.9. 562－569。



第２図　段丘堆積物と黒沢尻火山灰の分布


赤川
丹藤川
松川
葛根田川
四十四田ダム
外山ダム
米内川
雫石川
盛岡
中津川
御所ダム
築川
（秋田県）
山王海ダム
滝名川
葛丸川
豊沢ダム
稗貫川
花巻
豊沢川
湯田ダム
NEKOYATI
北上
猿ケ石川
田瀬ダム
遠野
和賀川
広瀬川
早瀬川
夏油川
人首川
江刺
胆沢川
水沢
（岩手県）
石渕ダム
白鳥川
衣川
砂鉄川
陸前高田
磐井川
一関
千厩川
気仙沼
金流川
黄海川
二泊川
三泊川
一泊川
鳴子ダム
迫川
江合川
古川
（宮城県）
北上川
石巻
0
10
20
30km
石巻湾

第３図　遺跡の位置

Ⅱ　遺跡の立地と周辺の遺跡

1．位置（第３図）

猫谷地遺跡は和賀郡江釣子村上江釣子本宿及び猫谷地に南北にまたがる形で所在するもので、東北本線北上駅の西方約3.3km、北上線江釣子駅の東方約1kmのところに位置し、遺跡の北側を国道107号線が東西に走り、南方約0.3kmには和賀川が東流して北上市の南東で北上川と合流している。なお猫谷地遺跡の名称は調査地点が登録上の本宿遺跡の東側地域、猫谷地古墳群の西側地域と二遺跡にまたがっているので、その二遺跡を総称して付したものである。

2．地形・地質（第１図・第４図・第６図）

猫谷地遺跡は二つの遺跡の総称であることは既述のとおりである。この二つの遺跡は地形的にみた場合大きな差異がある。本宿遺跡は金ケ崎段丘（新期）に載り、猫谷地古墳群は、沖積面の自然堤防上に立地している。

和賀川左岸の段丘は高い方より村崎野段丘（中位段丘）、金ケ崎段丘（低位段丘）の二つで構成されている。横川目の和賀川と尻平川の合流点の北西の一部を除けば、高位段丘である西根段丘は当地方では欠落している。村崎野段丘は黒沢尻火山灰層と村崎野浮石層をのせており、金ケ崎段丘ではこれらを欠いている。空中写真判読ならびに現地調査によれば、江釣子村ではこの二つの段丘は更に細分が可能である。

地形図上、横堰附近では、村崎野段丘は２段に、また高畑、野崎、曽山を結んだほぼ東西に伸びる崖線で金ケ崎段丘も２段に細分される。ただし、この細分は、黒沢尻火山灰層や村崎野浮石層が金ケ崎段丘形成以前に降下しているという、地質学研究者の従来の見解を前提としているものである。

金ケ崎段丘(新期)面は、数本の小河川で開析され、また段丘化した自然堤防が列状に良好な発達をみせている。自然堤防は比較的規模の大きいものであり、段丘面との間には和賀川の旧河道が存在する。なお調査の結果、この自然堤防は金ケ崎段丘の一部を形成しているものでないことが判明している。旧河道との比高は約１ｍである。この地域で検出された竪穴住居跡はいずれも自然堤防の尾根（ ridge ）より南側の緩斜面（ slope ）に、尾根に沿ってや、東西方向に占地している。また縄文中期末～後期初頭にかけての土器片やフレイク類が散見されることにより、少なくともこの時期までには、自然堤防は安定したものとなっていたと言えるであろう。それ以後の冠水の形跡はみられない。

3．基本層序（第４図）

低位段丘（金ケ崎段丘ー新期）は、耕作土、クロボク、シルト～粗砂・巨礫まじりの円礫層（瘤木礫層）という構成を示す。国道107号線沿いではシルト～粗砂を欠き、礫層上に直接クロボクが載るが、礫層南側に行くにつれて漸次傾斜し、それにつれてシルト～粗砂層の層厚も厚

いものになっている。崖線付近ではシルト～粗砂層の厚さは２ｍ近いものとなっている。上部はMatrix が粘土である。

旧河道の深掘りでは、低湿地特有の粘土、ピート、黒泥土の発達がみられる。ＥＣ30グリッドを例にとると堆積物は、耕土、黒泥土、ピート、ピート(材、ヨシ遺体を含む)、黒泥土、砂層という層序になる。他のグリッドの観察によると、下位の礫層の上部は若干〝揺れ〟を示すようである。ここで注目されるのは、表土から約30cmの horizon のピート中にみられる灰白色～黄色のパミスの存在である。このパミスは従来、古墳の周溝やロクロ土師器を出土する竪穴住居跡に見出されていたいわゆる「粉状パミス」と性状が同様のものである。

遺構中のパミスは人為的な堆積か、自然的な堆積物か以前は不明なものとして問題にされてきたが、ここでは新期の降下火山灰であることがほぼ明らかになった。

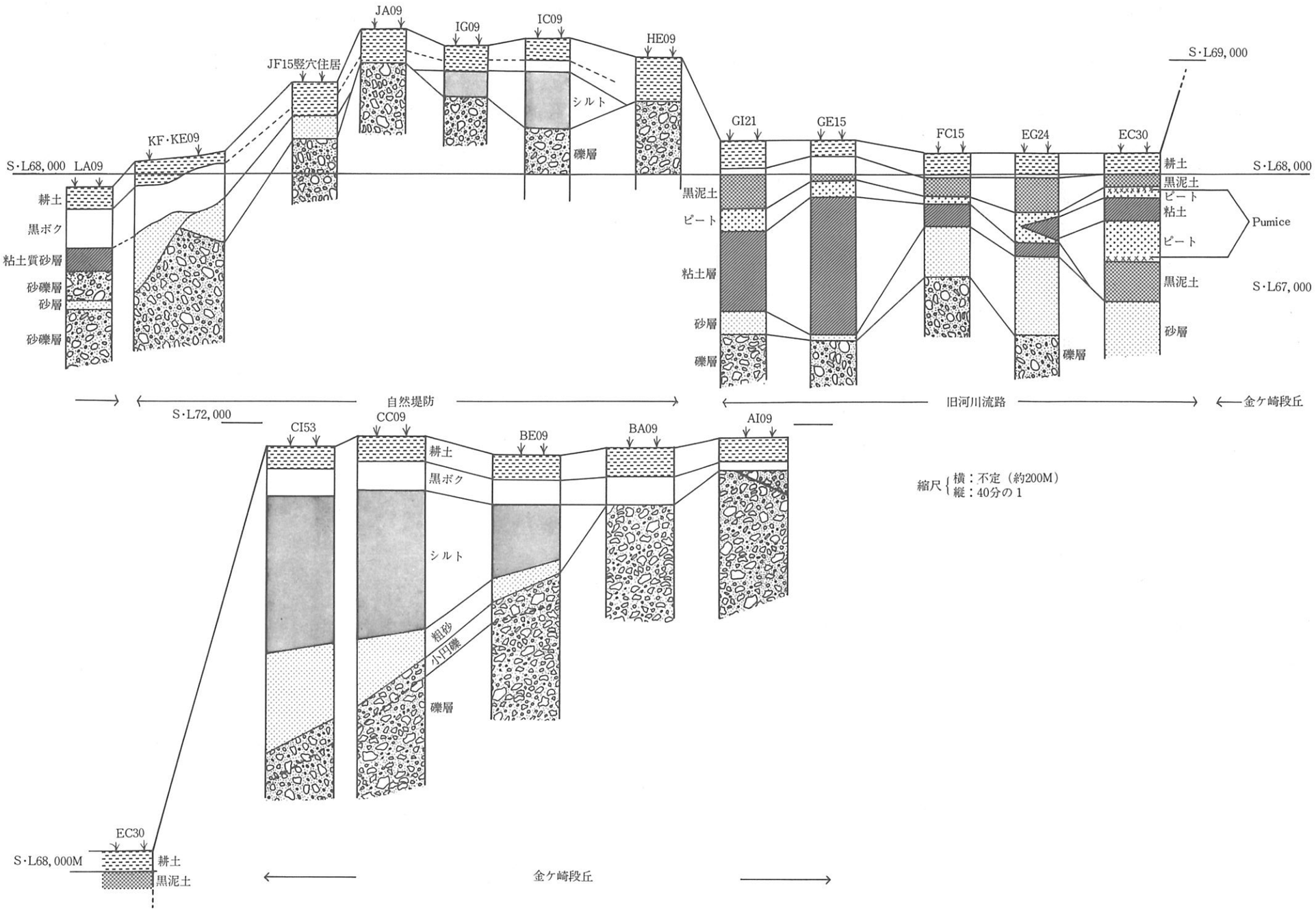
自然堤防堆積物の構成は、耕土、クロボク、シルト～粗砂・巨礫まじりの礫層である。礫層は新鮮な面をもつ亜円礫～円礫からなる。尾根の部分では礫層上にはシルト～粗砂を欠き直接クロボクが載る。

４．周辺の遺跡（第５図）

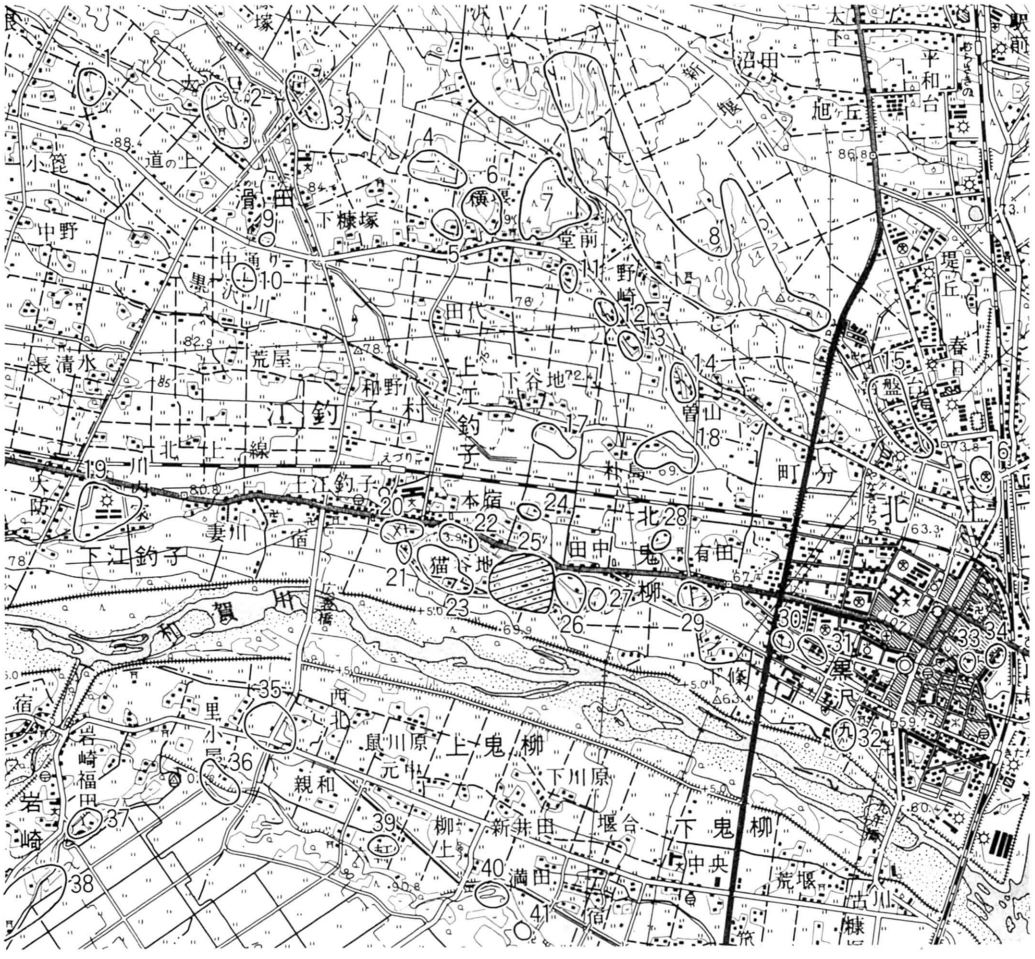
本調査区の北半部域（本宿）の載る金ケ崎段丘(新期面)縁辺沿い、及び南半部域（猫谷地古墳群）にあたる自然堤防上（河岸平野）には、東西にわたって多くの遺跡が立地している。主な遺跡としては、隣接した五条丸古墳群、八幡古墳群、4.5km西方に長沼古墳群などの群集墳の存在する遺跡や下江釣子羽場、塚遺跡等の奈良～平安時代の集落跡が分布している。その他遺跡数は少ないが縄文時代のものとして西方の竪川目、藤根、東方の北上市(九年橋遺跡―晩期)の遺跡があり、弥生時代のものは西方の藤根附近（念仏車、蔵屋敷遺跡）にわずかに散見される程度である。また西方500ｍ地点に中世の五条丸館跡がある。いずれ現段階では、奈良時代の遺跡が多い地帯と見ることができる。

段丘縁辺を離れて、北方の段丘面上や微高地、上位の村崎野段丘沿いでも各時代の遺跡が発見されている。本遺跡から５km内に立地する主なものには、新平遺跡（縄文、奈良～平安、中世）、鳩岡崎遺跡（旧石器、縄文、奈良～平安）、藤沢Ⅰ～Ⅳ遺跡（旧石器、奈良～平安）、下谷地遺跡（平安）、常盤台遺跡（平安）等があげられる。旧石器、縄文時代の遺跡は村崎野段丘沿いであるが、奈良～平安時代の遺跡は各地域に広がりを持って分布している。

一方、和賀川を挟んだ南方の低、中位段丘（金ケ崎段丘古期、村崎野段丘）上及びその縁辺には縄文～平安時代の遺跡とともに、10～20m をこえる段丘崖や湧泉、深い小谷地形を利用した中世の館跡が多く、柳上館、鹿島館、丸子館、梅ノ木館、観音館などが東西に連なって存在している。



第４図　猫谷地遺跡地質柱状図（A～L区）

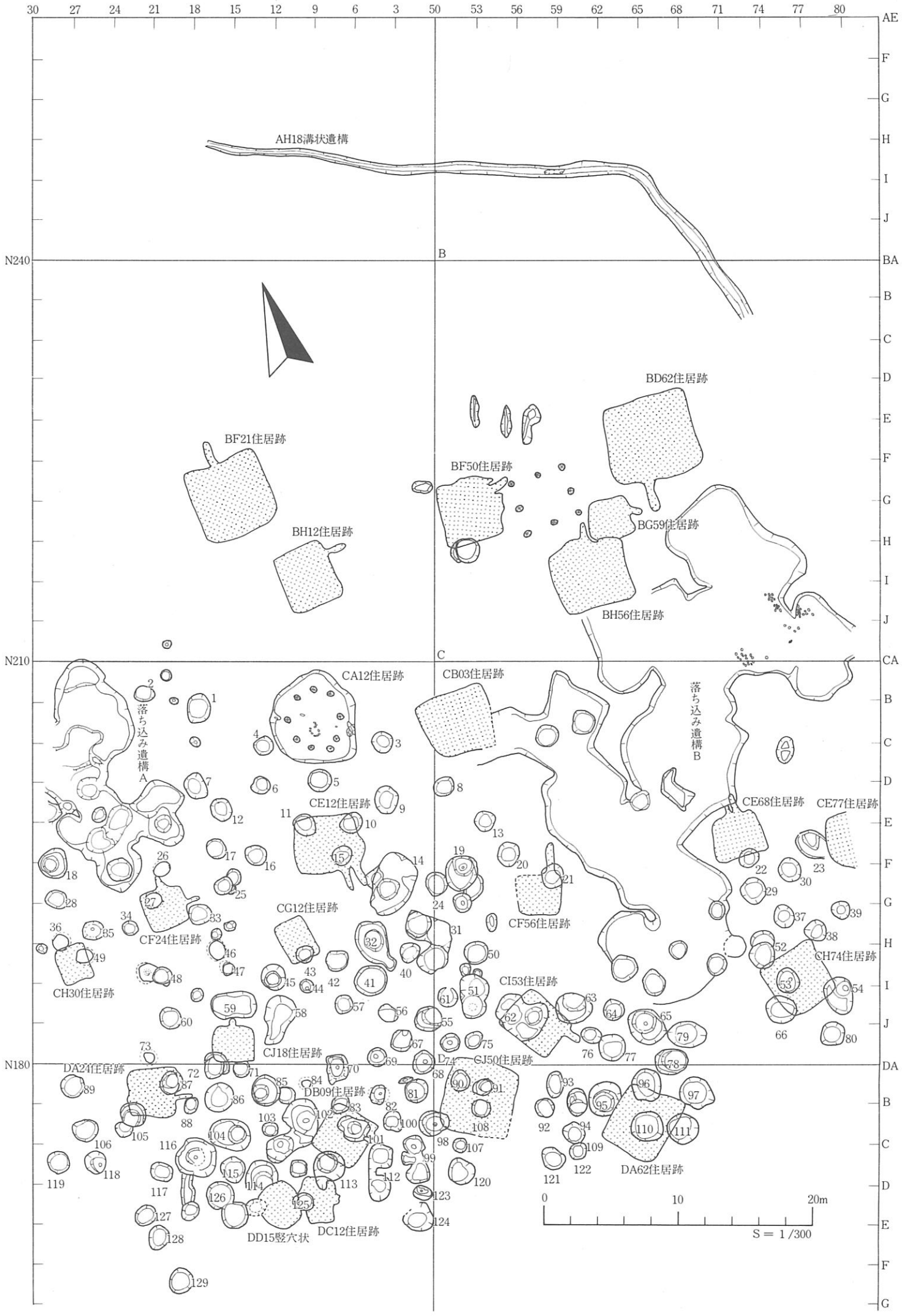


第５図　猫谷地周辺の遺跡（５万分の１）

第２表　遺跡名と時代

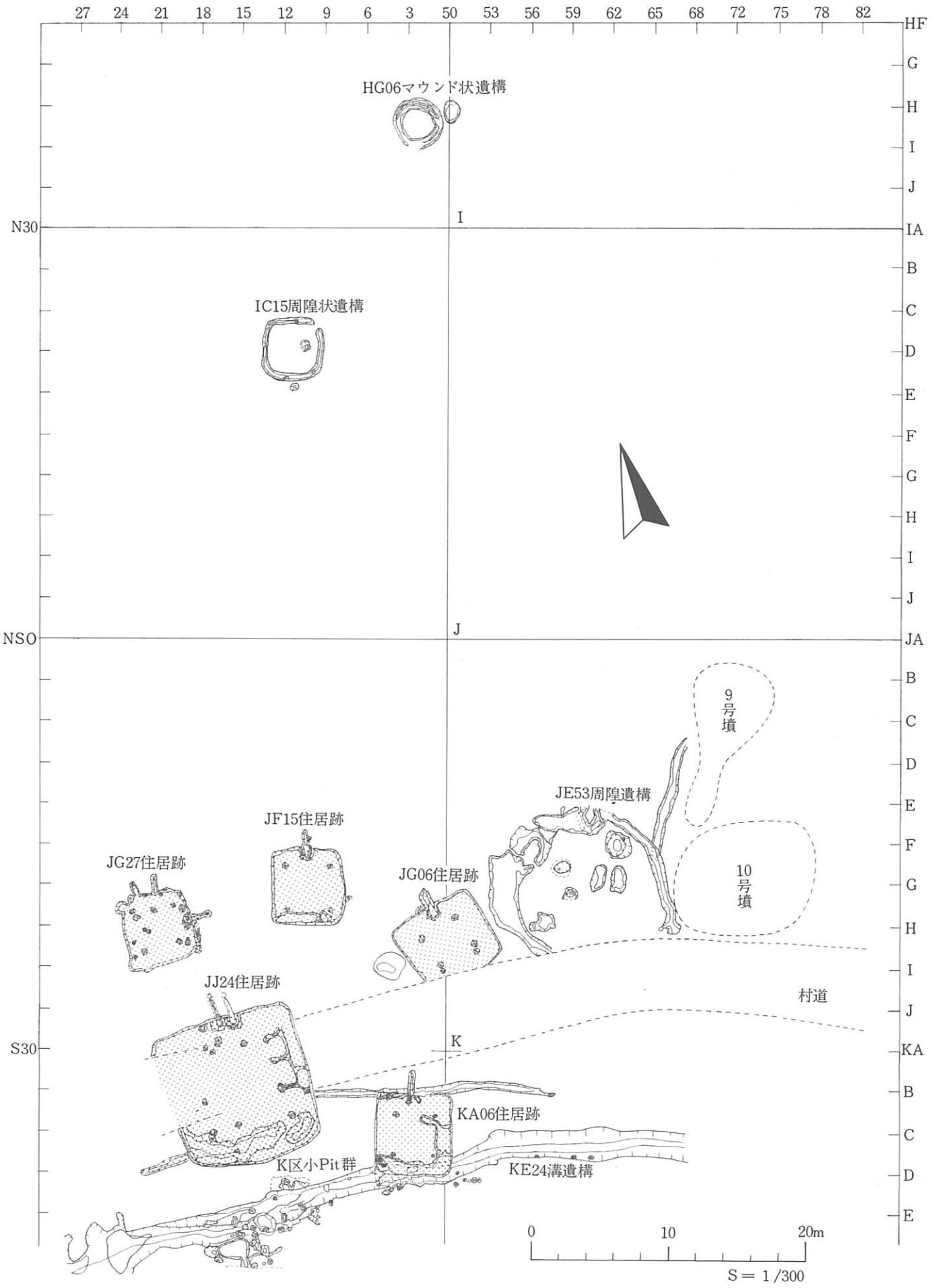
番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	道の上長根	奈良～平安	14	清水端	奈良～平安	28	高橋	平安
2	新平	縄文・奈良～平安 中世	15	常盤台	平安	29	鳥海柳	奈良～平安
			16	黒北高グランド	平安	30	鍛冶町南	
3	芦萱	縄文・奈良～平安	17	下谷地	平安	31	火薬庫西	
4	横堰Ⅰ	縄文・奈良～平安	18	朴島	平安	32	九年橋	縄文
5	〃Ⅱ	奈良～平安	19	下江釣子羽場	奈良～平安	33	諏訪神社境内	
6	鳩岡崎開拓	平安	20	塚	奈良～平安	34	和野	縄文
7	鳩岡崎	縄文・奈良～平安	21	五条丸館跡	中世	35	里小屋	平安
8	藤沢（Ⅰ～Ⅳ）	旧石器 奈良～平安	22	本宿羽場	平安	36	欠坂	縄文・平安
			23	五条丸古墳群	奈良	37	田中	縄文
9	持川	縄文	24	上藤木	平安	38	久田	縄文・平安
10	中通	奈良～平安	25	猫谷地 本宿	縄文・古墳～平安	39	六軒	縄文
11	鳩岡崎三館	中世		猫谷地 猫谷地古墳群	奈良	40	柳上館	奈良～平安・中世
12	野崎Ⅰ	奈良～平安	26	八幡古墳群	奈良	41	満屋敷	縄文
13	〃Ⅱ	奈良～平安	27	八幡	奈良～平安			

第6図　猫谷地遺跡地形図



大型ピット1～129(本文の記述順)

第7図　遺構配置図(1)A～D区



第8図　遺構配置図(2)H～K区

Ⅲ　検出された遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構・遺物は主に縄文時代と古代のものである。

縄文時代の遺構は竪穴住居跡１、竪穴状遺構１、大型ピット群（約160基）、小ピット類（15前後）、溝状ピット３、落ち込み遺構２である。これらは調査区の北半部区域（Ｂ～Ｄ区）の低位段丘上に発見されたものであり、水田をはさんだ南半部区域（Ｊ～Ｋ区）の自然提防止の平坦面には全く検出されなかった。大型ピットは古代の住居跡と重複しているものが少なくない。分布範囲はＣ～Ｄ区にわたり、さらに調査区外の西方や東方に広がってゆくと思われる。

縄文土器は後期初頭のものが多く、次いで中期中葉（大木 8b式）、少ないが中期初頭（大木7a式）の破片も出土している。スタンプ状等の土製品や各種の石器が伴出した。

弥生時代のものと思われる土器が１個体だけ出土したが、遺構はない。

古代の遺構は、竪穴住居跡24棟、竪穴状遺構３棟、掘立柱建物跡１棟、焼土遺構２基、周溝状遺構２、マウンド状遺構１等である。住居跡は南半の自然提防上に５棟、その他は北半の低位段丘上より検出されている。北半では縄文時代の遺構と重複するものが多く存在する。

古代の遺物は土師器、須恵器、紡錘車や砥石などの石製品、土錘、鉄斧などがある。土師器や須恵器は住居跡で共伴する内容から、その編年的な位置づけに良好な資料となり得るものである。植物遺体としては炭化米と住居跡に伴う炭化材が発見された。

なお当遺跡は猫谷地古墳群遺跡の区域内にあり、南半部には猫谷地第９号墳と第10号墳の２基の古墳が存在している。これらは保存することとなったため今回は調査対象外とした。

（調査地域）		（検出遺構）
北半区域（Ａ～Ｄ区）	縄文時代	○竪穴住居跡１棟（CA12）○竪穴状遺構１基（DD15） ○大型ピット約160基（CA21～DF21、及び落ち込み遺構内） ○小ピット類（約15基）○溝状ピット３基 ○落ち込み遺構２（Ｃ区）
	古代	○竪穴住居跡19（B～D区） ○竪穴状遺構３棟（B～D区） ○掘立柱建物跡１棟（Ｂ区） ○焼土遺構　２基　（Ｂ区）
南半区域（Ｈ～Ｋ区）	古代	○竪穴住居跡５棟（Ｊ区～K区） ○周溝状遺構２　（G区～Ｊ区） ○マウンド状遺構１（Ｈ区）

1　縄文時代の遺構と遺物

(1)CA12竪穴住居跡　第９図　図版５

〔**遺構の確認**〕　貯蔵穴状ピット群の北辺に検出され、南にはピット群が広がっている。古代の住居跡３棟（BH12住居跡、CB03住居跡、CE12住居跡）に隣接しており、その距離は４ｍ程である。

〔**重複**〕　重複する遺構はないが、隣接するピットはCB06ピット、CB15ピット、CC09ピットがある。

〔**平面形・規模**〕　比較的立ち上がりの明瞭な西側壁面から推定し、ほぼ円形のプランと思われる。南北6.9ｍ、東西6.3ｍで、その床面積は約32㎡の規模である。

〔**堆積土**〕　炭化物が含まれる黒褐色土であるが、検出面が床面に近く、その具体的な堆積状況は不明である。

〔**壁**〕　南東部や北部の壁高は５～９cmと極めて浅く、西側で13～18cmを測る。従って壁の掘り込み角度や床面との境など不明確な部分が多い。

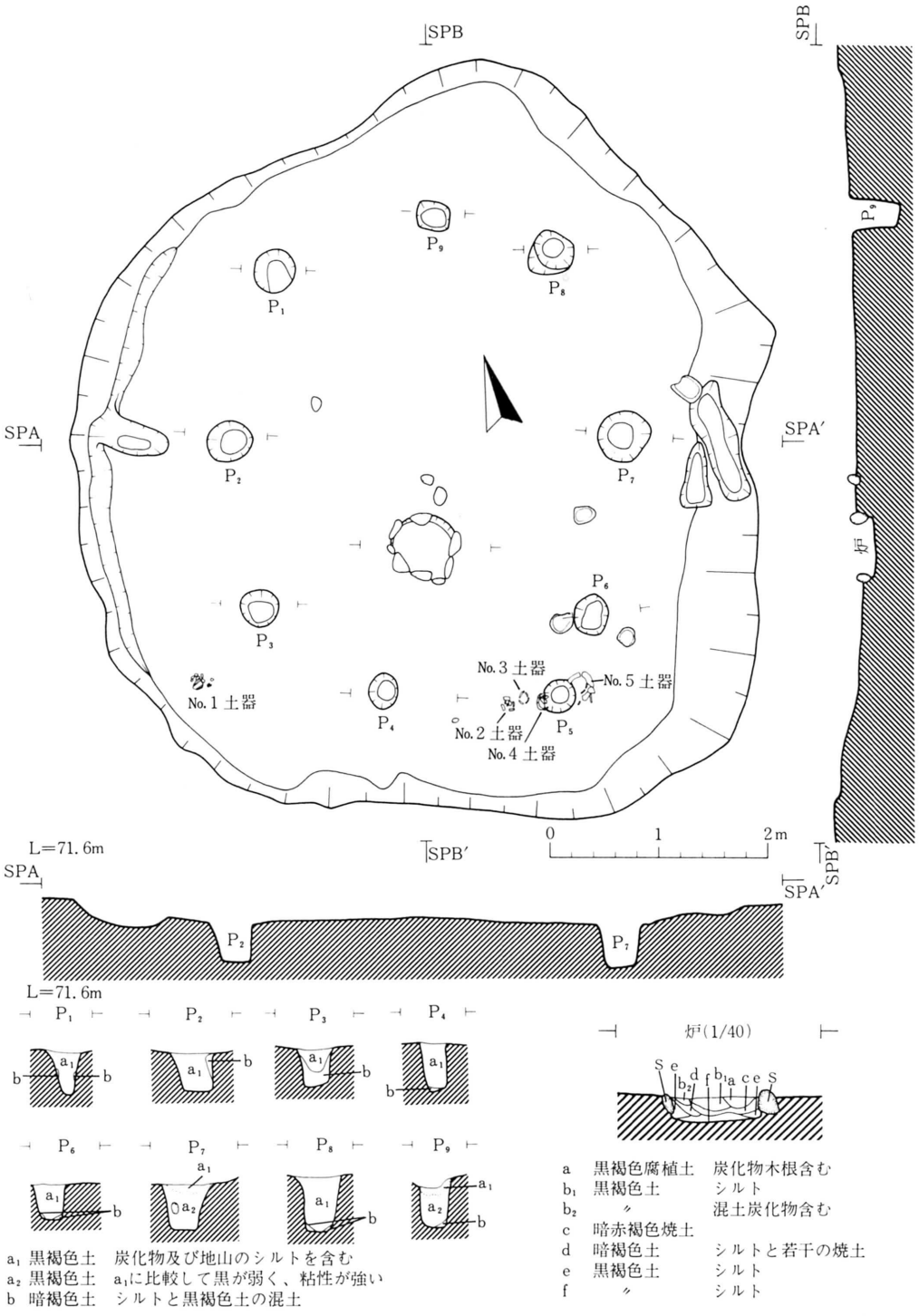
〔**床**〕　西側に若干低くなるが、その比高差は10cm内外でほぼ平坦である。多少の起伏の状況を見れば、炉跡の周辺はやや低く、また柱穴の外側にあたる床面はやや高まっている。床面には柱穴、石囲い炉、礫が検出され、また南側から縄文土器５個体（いずれも1/3～1/4残存）が出土している。西壁、東壁、２個所に長楕円形で深さ10cm程の掘り込みがある。

〔**柱穴**〕　柱穴と見られるピットが９個検出された。計測値は第３表に示した。上場径は25～45cm、深さ30～45cm程で、ほぼ円形に配列している。各ピットの中心点を結んだ間隔はP_1～$P_2$156cm、P_2～$P_3$155cm、P_3～$P_4$137cm、P_4～$P_5$160cm、P_5～$P_6$78cm、P_6～$P_7$170cm、P_7～$P_8$180cm、P_8～$P_9$115cmである。又、間隔のせまいP_5をはずしてP_4とP_6を結んだ距離は200cmとなる。堆積土は黒褐色土のａ層を主体に暗褐色のｂ層を側面や底面に含み、地山のシルト混じりの共通した様相を呈している。柱穴の断面形は円筒状が多く、若干幅の広がったバケツ状をなすものもある。掘り込みはやや上部が西に傾いた方向に向いているものが多い。配列が壁の円形に沿っていることと、その規模や堆積土の共通性から同時に設置された柱穴と推定される。南東部のP_5とP_6の間隔のせまい部分は、他の柱穴部分とは違った箇所と見られ、住居跡構造の中の出入口とか、特殊なエリアと思われる。

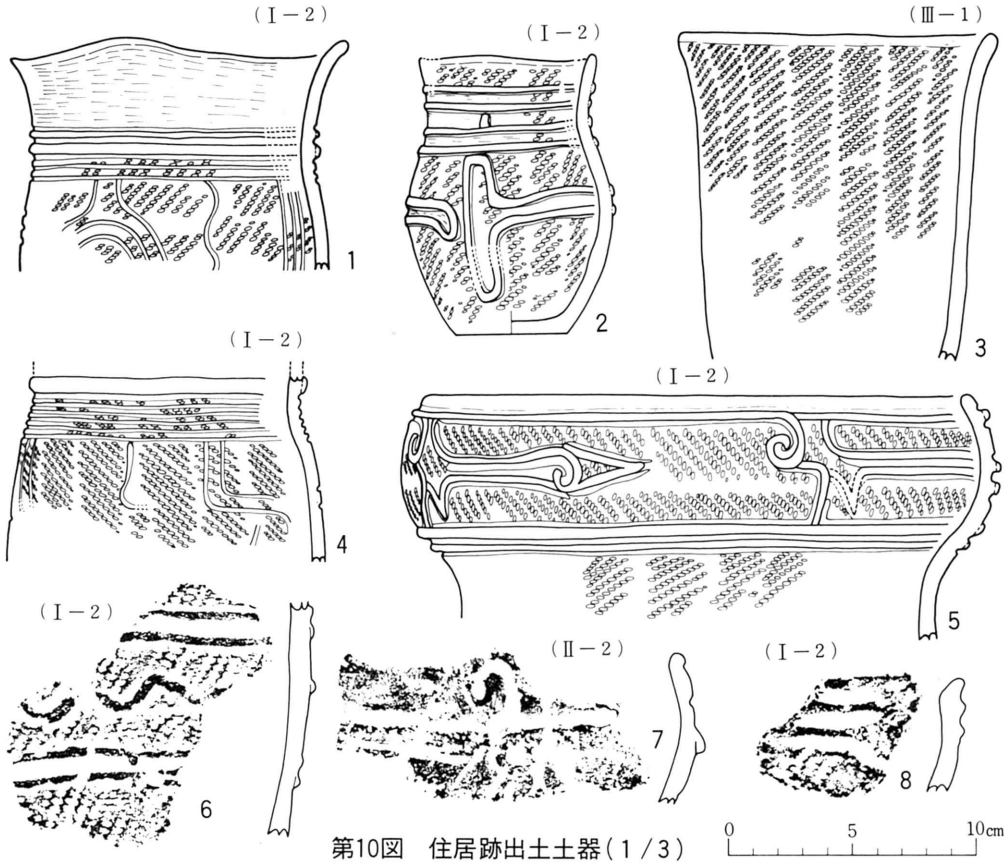
〔**炉**〕　住居跡中央より南寄り部分に検出された。床面を15cm程掘り込みその周囲に炉縁石を並べて構築した石囲炉である。規模は径65cm程度の円形プランで、使用された炉縁石は長径10

ピットNo.	上　場　cm	下　場　cm	深　さ　cm
1	40×38	30×20	40
2	42×37	25×20	35
3	35×35	22×20	35
4	32×27	18×15	40
5	30×30	15×15	30
6	37×30	25×17	33
7	47×45	25×22	42
8	36×35	19×17	50
9	30×25	22×18	45

第３表



第９図　CA12竪穴住居跡平断面図（１/60）



第10図　住居跡出土土器（1／3）

～25cmの円礫10個前後である。堆積土は上層に炭化物を含み、中層に焼土層が入っている。

〔**出土遺物**〕　堆積土から復元可能の縄文土器２個体（1/3程度残存）と他の口縁部５、胴部約50点、床面直上から復元個体５（図中のNo.１～No.５）出土している。定形的な石器はなく、石核様のもの１点である。No.２～No.５の土器はP_5と周囲に隣り合わせにまとまって出土したものであるが、いずれも完形品ではない。出土状況はNo.２は横倒、No.３は倒立、No.４は正位、No.５は倒立であった。図のように隆起線文や平行沈線の曲線文など中期中葉（大木8b式）のものが大部分であるが、後期初頭の土器も少量混じっている。又住居跡を含む周辺の表採遺物にも約100点あり、文様の判明するものはほとんど大木8b式である。

遺物のあり方から、本住居跡の構築時期は縄文中期中葉（大木8b式期）と推定される。

No.１の土器は口径13.5cmの小型深鉢で、口縁部は無文帯、頚部は２本の隆起線と５本の平行沈線文、体部は平行沈線の渦巻文が施文されている。大波状口縁で口縁～底部まで欠損部分が多く全体の1/5程の残存である。No.２の土器は口径7.5cm、底径4.5cm、器高11cmの小型深鉢である。隆起線の区画文が施されており、4/5残存する。No.３の土器は単節斜縄文RL縦回転の地文のみの小型深鉢で、口径12.5cmを測る。体部下半から欠損し1/3残存している。No.４の土

器は口縁部と底部を欠損しているが、やはり小型深鉢である。平行沈線文が施文され1/4残存している。No.5の土器は口径22cmのキャリパー型中型深鉢である。隆起線による口縁部文様帯に渦巻文等施している。No.6とNo.8は、隆起線文をもつ体部破片である。No.1～No.6までは施文の特徴からすべて中期の大木8b式に比定されるが、No.7の破片は磨消縄文や沈線文、小突起など後期初頭のものである。

(2)DD15竪穴状遺構　第11図（図版6）

〔遺構の確認〕　DC12住居跡の西側に隣接して検出された。ピット群域の南端部にあたる。

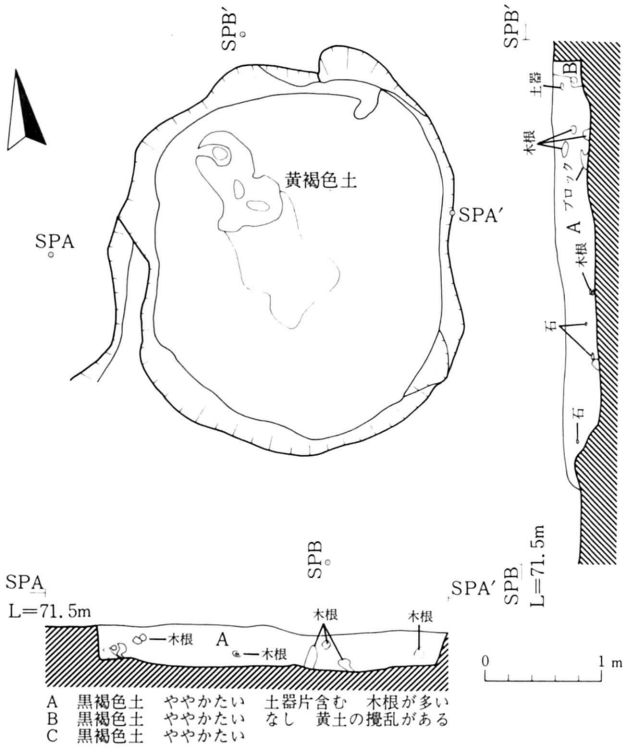
〔重複〕　DC12住居跡の西壁に切られているが、この境の下部にはDD12ピットがあり、東側ではDD18複合Cピットと切り合っている。この2つのピットとの先後関係は明確でない。

〔平面形・規模〕　南北3.3m、東西2.7mの小規模な楕円形プランである。

〔堆積土〕　黒褐色土の単一層であるが、北と西側に黄褐色土のかく乱ブロック土・木根、炭を少量含む。

〔壁〕　切り合い部や検出段階の掘りすぎがあり、必ずしも平坦な状態ではないが、壁高は30cm前後を測る。ほぼ直に掘り込まれているが、南側はゆるやかである。

〔床〕　多少の凹凸をもちながら北から南にかけてゆるやかに傾斜し、その差は10cm程である。炉跡は見られなかったが、中央から北の壁際まで黄褐色の粘土質土が存在していた。かなりの量である。



第11図　DD15竪穴状遺構平断面図（1/60）

〔出土遺物〕　堆積土の中から縄文土器6点（口縁2、体部4）である。いずれも単節斜縄文の地文のみで、時期比定はできなった。

〔性格〕　竪穴状の形態や規模から小型の住居跡とも見られるが、柱穴が検出されなかったため不明である。ただ周囲に散在する大型のピット類とは違った性格のものであろう。設営時期は確実性は低いが、遺物から一応縄文時代のものと把えた。

(3)大型ピット群

開口部や深さが1m前後を測る大型ピット約160基は、調査区のCブロック、Dブロックに密集し、不定形な落ち込み遺構や古代の住居跡と重複しているものがかなりある。ピットから出土する遺物のほとんどが縄文土器であり、その設営期は縄文時代と推定されるものである。これらの中で、後述の落ち込み遺構内のものはその項でとりあげ、ここではそれらを除いたピットの形態、規模、堆積土、遺物について述べる。

記述の順序は遺構配置の上で北側から南へ、つまりCA区からはじめてDF区で終える形をとった。ピットによっては断面図を作成できなかったものがあり、それらは平面図のみ掲載している。断面図中のスクリーントーン部分は、地山の黄褐色土を多量に含む層である。文中で平面形、断面形、開口部径、底径、深さは複合したと思われるものについてのみふれており、その他は第4表の大型ピット一覧表（72～76）に一括して記載した。各ピットの番号は第7図の遺構配置図中の番号に一致させている。

① **CA21No.1ピット**（第12図）

堆積土は6層に区分され、レンズ状に整然となっており、自然に堆積したものとみられる。壁際へブロック状に入っている6層は壁の崩落土であろう。すべての層に小礫がふくまれるが4層と5層に特に多い。遺物は縄文土器30点（口縁1、体部29）である。網目状撚糸文や沈線文などから後期初頭のものと思われる。出土層位は不明である。

② **CA24ピット**（第12図）

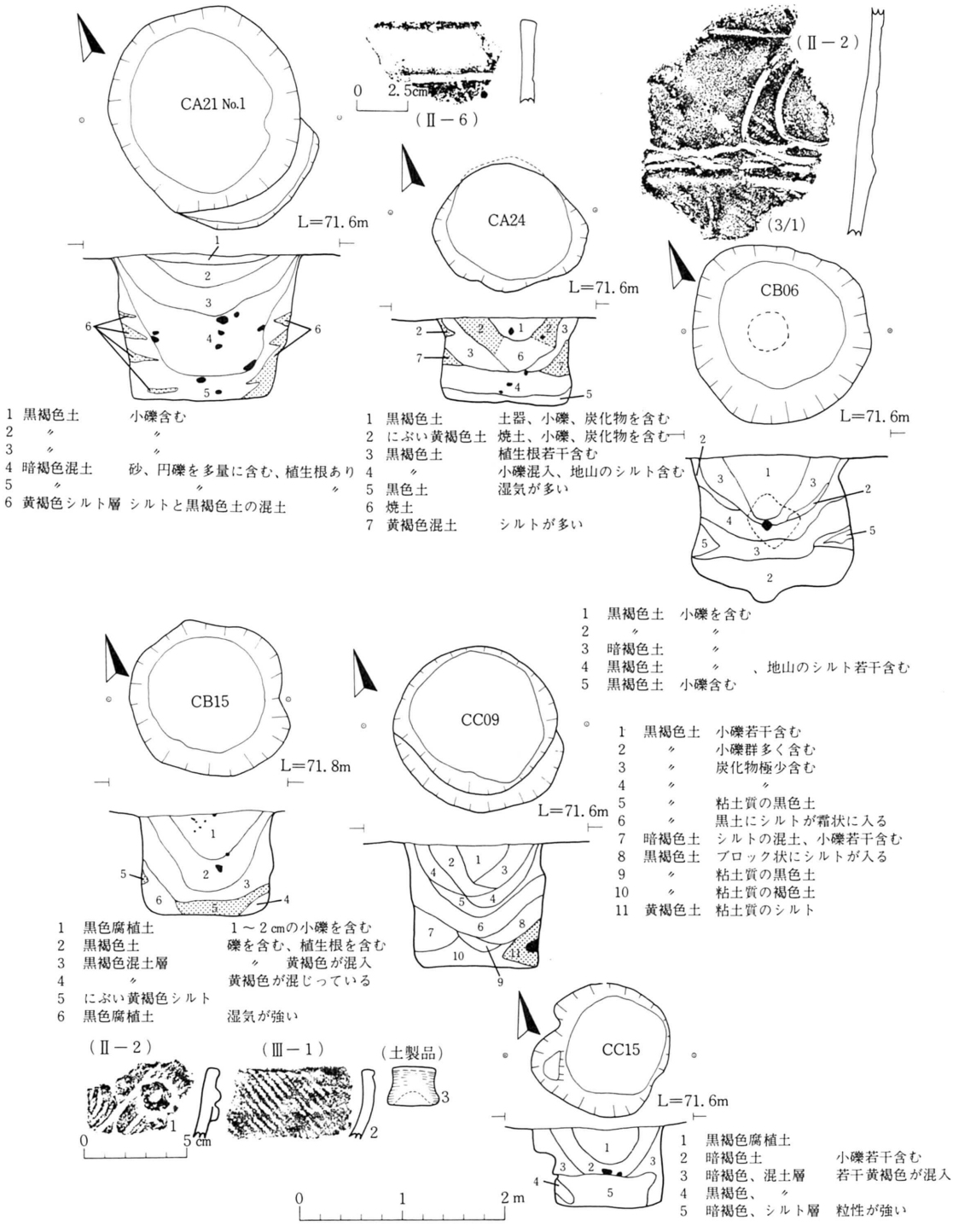
堆積土は7層に区分され、下層部堆積後、間をおき7層のブロック土や上層が徐々に自然堆積したものと見られる。1層、2層には炭化物や焼土を多く含み、投げ捨てられたと考えられる。縄文土器21点（体部20、底部1）でいずれも磨滅が著しい。連鎖状隆起線や沈線文などから後期初頭であろう。出土層位は最上層の1層である。

③ **CB06ピット**（第12図）

底面ほぼ中央に径35cm、深さ15cmの小ピットがある。堆積土は5層に区分され、黒褐色土層と暗褐色土がレンズ状に互層を成しており自然堆積と見られる。1～3層の中央付近に礫が多い（点線部分）。遺物は縄文土器の体部細片8点で時期、出土層位は不明である。

④ **CB15ピット**（第12図）

堆積土は6層に区分され、レンズ状に整然となっており自然堆積と見られる。シルトの混入は全体にあるが、黒褐色土が主体となっている。下層にはシルトの小ブロック土がある。上層の1～3層には礫が含まれる。遺物は縄文土器29点（口縁5、体部23、底部1）、耳栓状の土製品（図中の3）である。ボタン状貼付文や沈線文などから後期初頭と思われる。出土層位は不明である。



第12図　大型ピット平断面図(1 /60)

⑤　**CC09ピット**（第12図）

堆積土は11層に区分され、レンズ状をなしており自然堆積と見られる。下層には崩落土とみられる黄褐色土が小ブロック状に混入している。２層中央に小礫が多く混入する。遺物の出土はない。

⑥　**CC15ピット**（第12図）

開口部の西側に崩落部分をもつ。堆積土は５層に区分され、下層部堆積後中～上層がレンズ状に自然堆積したと見られる。壁際の３層には黄褐色土が混入する。２層には礫が含まれる。遺物は、縄文土器20点（口縁２、体部17、底部１）と石器のスクレーパー１点が出土した。無文の口縁部片の器形と同じく無文の袖診土器の底部や、地文に網目状撚糸文が見られることから後期初頭のものと思われる。出土層位は不明である。

⑦　**CC21ピット**（第13図）

底面は砂礫層が露出している。堆積土については不明である。出土遺物はない。

⑧　**CC50ピット**（第13図）

堆積土は10層に区分され、概ねレンズ状であるが、下層の９層は比較的短時に入ったと推定できる。また５、６層は壁の崩落土であろう。全般的にシルトの混入があり、上層には小礫が含まれている。遺物の出土はない。

⑨　**CD06ピット**（第13図）

堆積土は13層に区分され、やや複雑な混入状況を示しているが堆積方向がレンズ状となっており自然堆積と考えられる。砂質シルトの混入が各層にあり、又上層の１～８層には小礫が含まれる。底面に円礫３個検出された。遺物は図の小型壺型精整土器が１層から出土している。口縁部と体部下半に欠損部があり、器高は10cm前後と推定される。無文地に平行沈線の曲線文が施され、後期初頭のものと思われる。

⑩　**CD09ピット**（第13図）

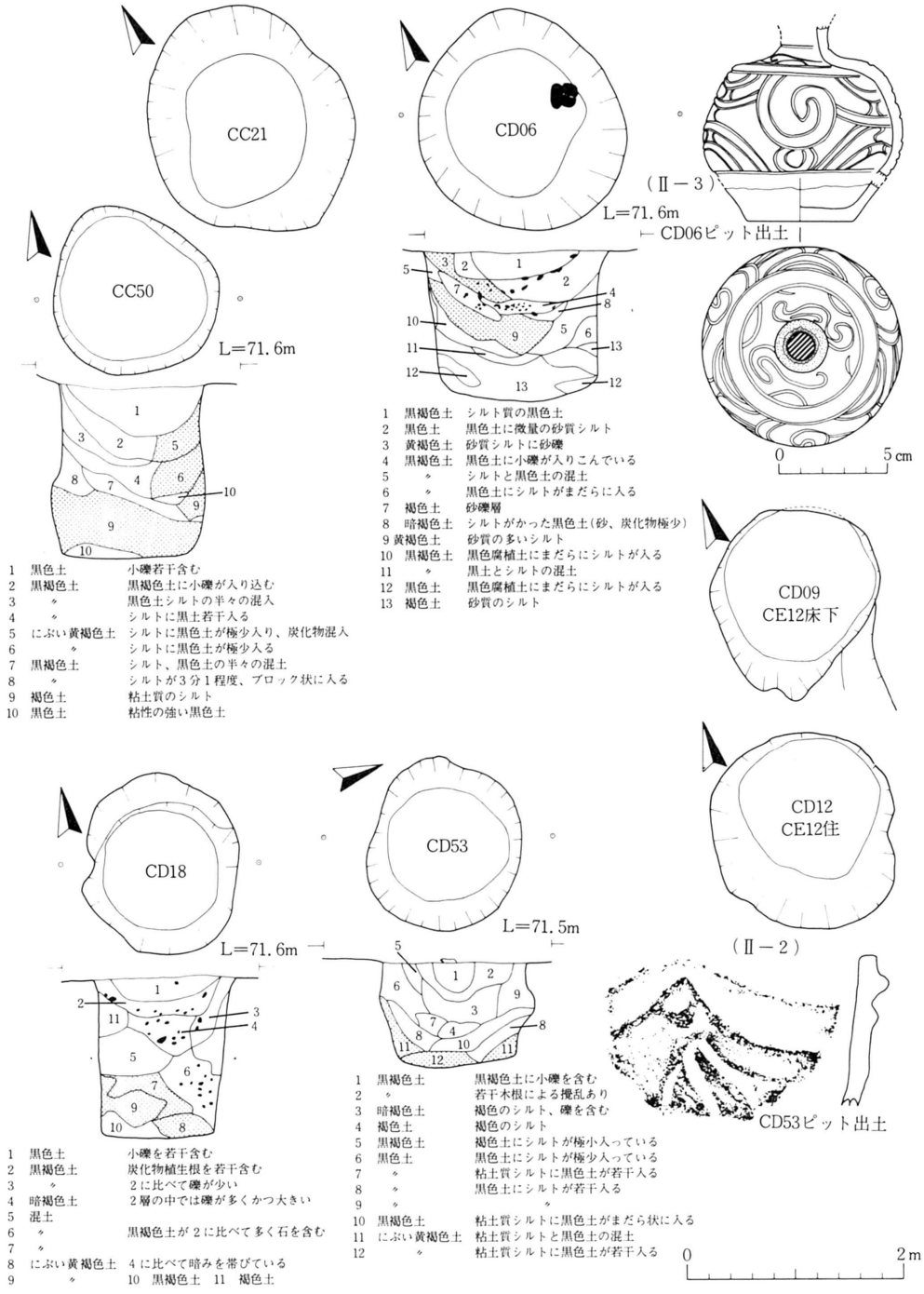
CE12住居跡の北東隅の床面下にかかって検出された。堆積土や断面形については不明である。遺物は出土していない。

⑪　**CD12ピット**（第13図）

CD09ピットと同様にCE12住居跡の北西隅の床面下にかかって検出された。断面形や堆積土については不明である。遺物の出土はない。

⑫　**CD18ピット**（第13図）

深さが150cmとかなり深い。堆積土は11層に区分され、上層はレンズ状に、下層はブロック状に堆積している。７－９層を短時間な堆積土と見れば、上層は自然に埋没していたものと考えられるが、下層は人為的に埋めた可能性もある。１～４、６層には小礫が含まれる。遺物は



第13図　大型ピット平断面図(1/60)

1層の上部に縄文土器の大型深鉢の底部等7点である。縦の撚糸文を地文としており、中期末～後期初頭のものと思われる。

⑬ **CD53ピット**（第13図）

堆積土は12層に区分され、流れ込みや小ブロックがレンズ状に堆積しており自然堆積と見られる。11層と12層は壁の崩落土と考えられる。全体に地山のシルトが混入し、上層には礫が含まれる。遺物は縄文土器7点（口縁2、体部5）が1層から出土した。ミガキ調整の隆起線やボタン状貼付文、沈線文と磨消縄文等後期初頭のものと思われる。破片数には同一個体のもの5点を含み、磨滅が見られる。

⑭ **CE06複合ピット**（第14図）

いくつかのピットが複合したものと見られるが堆積土や切り合い関係は不明である。部分的に崩落部やふくらみを持つ所があり、開口部150㎝内外のピットを想定すれば少なくとも4個以上と考えられる。中央のピットの深さは120㎝、周囲の掘り込み面の深さは65㎝～100㎝である。遺物は復元個体など縄文土器70点、土師器坏口縁部3点が堆積土の上層から出土している。図1の土器は口径32㎝、器高50㎝以上の大型深鉢で平行隆起線文や沈線文による渦巻文などが施文され、後期初頭と思われる。4分の1程残存している。他に地文のみの大型深鉢（3分の1残存）や後期初頭と中期の大木8式の破片が混在している。

⑮ **CE09ピット**（第14図）

CE12住居跡の東南かまど焚口部分の床下から検出された。堆積土、断面形については 不明である。遺物は出土していない。

⑯ **CE15ピット**（第14図）

堆積土は5層に区分され、レンズ状をなしており自然堆積と見られる。2層には小礫が含まれ、底面には10個程の円礫が検出されている。遺物は縄文土器9点（体部8、底部1）でいずれも磨滅があり時期比定はできない。出土層位は不明である。

⑰ **CE18ピット**（第14図）

堆積土は7層に区分され、上層はレンズ状であり自然堆積と見られるが、3～5層の下層部は崩落土もしくは流れ込みと考えられ、地山のシルト質土に近い。2、4層に小礫が含まれる。遺物は縄文土器5点（体部4、底部1）でいずれも細片であるが、他に無文の袖診土器（図中ー1/2残存）が出土した。層位は不明である。

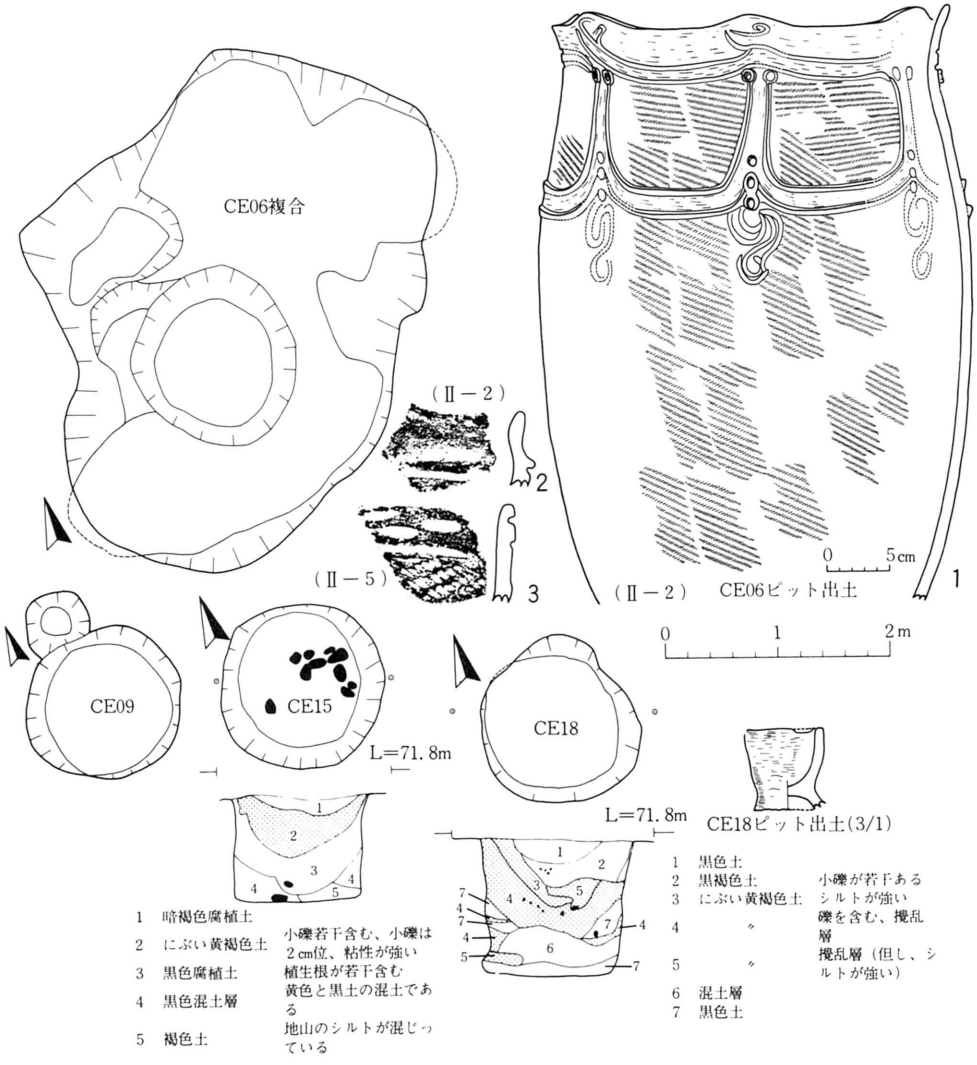
⑱ **CE30ピット**（第15図）

壁際や底部にブロック状の崩落土があり、その上にレンズ状に堆積していることから自然堆積と見られる。ピット中央部に円型の掘り込みがあり、二重円構造となっている。開口部径は200㎝、深さ80㎝、底面の掘り込みは口径100㎝、深さ40㎝である。最下層の8層の砂礫層部

分は単一層であり、それより上部の層とは違った埋没過程があったと思われる。また大小２つのピットの複合とも考えられるが堆積土からは判断できない。遺物は縄文土器54点（うち復元土器２、口縁６、体部45、底部１）で、いずれも磨滅が著しい。縦の撚糸文の地文をもつものが多く器形からも後期初頭と思われるものがほとんどを占めるが、中期の大木８b式の破片(拓影５）も２点混入している。出土層位は明確でない。

⑲ CE50複合ピット（第15図）(図版７）

ａピットとｂピットは図のように連なっている形態である。ａピットは南側円形ピット（推定）と切り合っているが、さらに底部の北側にピット状の掘り込みがあり、その中央に小ピッ



第14図　大型ピット平断面図(１/60)